

茨城県教育財団文化財調査報告第125集

主要地方道取手東線緊急地方道路
整備事業地内埋蔵文化財調査報告書

西 方 貝 塚

平成 9 年 6 月

茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団

作業室用

茨城県教育財団文化財調査報告第125集

主要地方道取手東線緊急地方道路 整備事業地内埋蔵文化財調査報告書

にし かた かい つか
西 方 貝 塚

平成 9 年 6 月

茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団

序

茨城県は、産業・経済の発展に伴う広域流通機構の整備と、県土の普遍的な発展を図るために、県内の交通体系の整備を進めております。

主要地方道取手東線道路改良工事は、その一環として取手市の小文間地区から龍ヶ崎市にかけてのバス路線の確保と交通渋滞の緩和を目的として計画されたもので、その予定地内には、多くの埋蔵文化財包蔵地が確認されています。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県から埋蔵文化財発掘調査についての委託を受け、主要地方道取手東線緊急地方道路整備事業⁽¹⁾内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。

本書は、西方貝塚の調査成果を取録したものであります。本書が研究の資料としてはもとより、郷土の歴史の理解を深めると共に、教育、文化の向上の・助として広く活用されますことを希望いたします。

なお、発掘調査及び整理を進めるにあたり、委託者である茨城県からいただいた多人なる御協力に対し心から御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、取手市教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位から御指導、御協力をいただいたことに、衷心より感謝の意を表します。

平成9年6月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 橋 本 昌

例 言

- 1 本書は、茨城県の委託により、財団法人茨城県教育財団が、平成8年8月から9月まで発掘調査を実施した茨城県取手市大字小文間字中妻耕地4155番地の1ほかに所在する^{（附録図表）}西方貝塚の発掘調査報告書である。
- 2 西方貝塚の調査及び整理に関する当教育財団の組織は、次のとおりである。

理 事 長	橋 本 昌	平成7年4月～	
副 理 事 長	中 島 弘 光 齋 藤 佳 郎	平成7年4月～ 平成8年4月～	
常 務 理 事	梅 澤 秀 大 齋 藤 紀 彦	平成8年4月～平成9年3月 平成9年4月～	
事 務 局 長	小 林 隆 郎 小 西 村 敏 一	平成8年4月～平成9年3月 平成9年4月～	
埋 蔵 文 化 財 部 長	沼 田 文 夫	平成8年4月～	
埋 蔵 文 化 財 部 長 代 理	河 野 佑 司	平成6年4月～	
企 画 管 理 課	課 長	小 幡 明 河 崎 孝 典	平成8年4月～平成9年3月 平成9年4月～
	課 長 代 理	根 木 水 達 清 小 高 五十二	平成7年4月～ 平成9年4月～（平成8年4月～平成9年3月 係長） 平成8年4月～
	主 任 調 査 員		
経 理 課	課 長	河 崎 孝 典 鈴 木 三 郎	平成8年4月～平成9年3月 平成9年4月～
	主 査	田 所 多 佳 男	平成8年4月～
	課 長 代 理	人 高 春 夫	平成7年4月～平成9年3月
	主 任	小 池 本 孝 勉	平成7年4月～ 平成9年4月～
	主 事	柳 西 孝 典	平成8年4月～平成9年3月 平成9年4月～
調 査 一 課	課 長（部長兼務）	沼 田 文 夫	平成8年4月～
	調 査 第 一 班 長	萩 野 谷 悟 亨	平成6年4月～
	主 任 調 査 員	仙 波 亨	平成8年8月～平成8年9月 調査
	主 任 調 査 員	野 田 良 直	平成8年8月～平成8年9月 調査
整 理 課	課 長	小 泉 光 正	平成9年4月～
	首 席 調 査 員	川 井 正 一	平成8年4月～
	主 任 調 査 員	野 田 良 直	平成9年4月～平成9年6月 整理・執筆・編集

- 3 本書で使用した記号等については、凡例を参照されたい。
- 4 本書の作成にあたり、魚骨・獣骨・貝の種類同定については西本豊弘氏（国立歴史民俗博物館助教授）にご指導をいただいた。
- 5 発掘調査及び整理に際して、御指導、御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

6 遺跡の概略

ふりがな	しゆようほうどうとりであすませんきゅうらほうどうるせいびじぶうちまいどうふんかざいちようきほうこくしよ								
書名	主要地方道取手東線緊急地方道路整備事業地内埋蔵文化財調査報告書								
副書名	西方貝塚								
巻次									
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告								
シリーズ番号	第125集								
著者名	野田良直								
編集機関	財団法人 茨城県教育財団								
所在地	〒310 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587								
発行日	1997(平成9)年6月30日								
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	標高(m)	調査期間	調査面積	調査原因	
所取遺跡	所在地								
にしかたかいづか 西方貝塚	いばらきのとくしよおあき 茨城県取手市大字 おらんまあきなかづまこうち 小文間字中養耕地 4155番地の1ほか	08217 -1	35度 53分 05秒	140度 06分 18秒	20 ~ 23	19960701 ~ 19960930	1,903㎡	主要地方道 取手東線緊急 地方道路 整備事業 に伴う事前調 査	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
西方貝塚	集落跡	縄文 中・近世 時期不明	竪穴住居跡 4軒 土 坑 2基 地点貝塚 9か所 遺物包含層 1か所 溝 9条 道路状遺構 1条 地下式塚 1基 井 戸 1基 土 坑 5基 ピット群 2か所	縄文土器片(早期・中期) 魚骨・獣骨・石器・石鏃 土師質土器・鉄製品・銅製品・古銭・陶磁器片	縄文時代及び中・近世の複合遺跡である。地点貝塚が検出され、当時の生活の一端をうかがうことができる。				

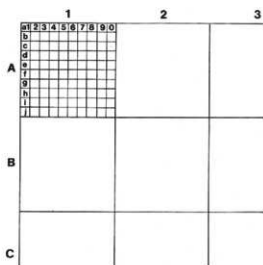
凡 例

- 1 西方貝塚の発掘調査を実施するに当たり、遺跡及び遺構の位置を明確にするために調査区を設定した。

調査区の設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標を基準点とし、X軸（南北）-12,744m、Y軸（東西）+24,484m、の交点をそれぞれに基準点（A1a₁）とした。

大調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を東西南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西、南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C……、西から東へ1、2、3……とし、「A1区」、「B2区」のように呼称した。大調査区内の小調査区は、北から南へa、b、c……j、西から東へ1、2、3……0とし、名称は、大調査区の名称を冠し、「A1a1区」、「B2b2区」のように呼称した。



第1図 調査区呼称方法概念図

- 2 遺構、遺物、土層に使用した記号は、次のとおりである。

遺構 住居跡-SI 土坑-SK 溝-SD 道路状遺構-SF 井戸-SE ビット-P

遺物 土器-P 土製品-DP 石製品-Q 金属製品・古銭-M 拓本土器-TP

土層 攪乱-K

- 3 遺構・遺物の実測図中の表示は、次のとおりである。



- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

- 5 遺構・遺物実測図の作成方法及び掲載方法については、次のとおりである。

- 遺跡の全体図は縮尺200分の1、住居跡や土坑は60分の1に縮尺し掲載した。
- 遺物は原則として3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては、個々に $S = 1/\bigcirc$ と表示した。
- 長軸方向は長径長軸として、その長軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 $N-10^{\circ}-E$ 、 $N-10^{\circ}-W$ ）。なお、[] を付したものは推定である。
- 土器の計測値は、A-口径 B-器高 C-底径 D-高台径 E-高台高とし、単位はcmである。なお、現存値は（ ）で、推定値は [] を付して示した。
- 遺物観察表の備考の欄は、土器の残存率、実測(P)番号、出土位置及びその他必要と思われる事項を記した。

目 次

序	
例言	
凡例	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 道跡	7
第1節 道跡の概要	7
第2節 道跡と遺物	7
1 壘穴住居跡	7
2 地点貝塚	15
3 土坑	15
4 ビット群	18
5 地下式塚	22
6 井戸	23
7 溝	26
8 道跡状遺構	31
9 遺物包含層	31
10 道構外出土遺物	36
第3節 まとめ	42
付表 西方貝塚出土の動物遺体	43

挿 図 目 次

第1図	調査区呼称方法概念図	第18図	第1号地下式竈実測図	23
第2図	西方貝塚周辺遺跡分布図	第19図	第1号井戸実測図	24
第3図	A・B区調査位置図	第20図	第1号井戸出土遺物実測図	25
第4図	第1号住居跡実測図	第21図	溝土層・断面実測図	26
第5図	第1号住居跡出土遺物実測図	第22図	第4号溝出土遺物実測図	27
第6図	第2, 3号住居跡実測図	第23図	第5号溝出土遺物実測図	28
第7図	第2号住居跡出土遺物実測図(1)	第24図	第6号溝出土遺物実測図	29
第8図	第2号住居跡出土遺物実測図(2)	第25図	第8号溝出土遺物実測図	30
第9図	第3号住居跡出土遺物実測図	第26図	第1号道路状遺構上層・断面実測図	31
第10図	第4号住居跡実測図	第27図	第1号遺物包含層出土遺物実測図(1)	33
第11図	第4号住居跡出土遺物実測図	第28図	第1号遺物包含層出土遺物実測図(2)	34
第12図	土坑実測図	第29図	第1号遺物包含層出土遺物実測図(3)	35
第13図	第1号ピット群実測図(1)	第30図	遺構外出土遺物実測図(1)	37
第14図	第1号ピット群実測図(2)	第31図	遺構外出土遺物実測図(2)	38
第15図	第1号ピット群実測図(3)	第32図	遺構外出土遺物実測図(3)	39
第16図	第2号ピット群実測図(4)	第33図	遺構外出土遺物実測図(4)	40
第17図	第1号ピット群出土遺物実測図	付 図		

表 目 次

表1	西方貝塚周辺遺跡一覧表	4	表3	西方貝塚土坑一覧表	17
表2	西方貝塚住居跡一覧表	14	表4	西方貝塚溝一覧表	30

写真図版目次

PL 1	西方貝塚遠景, 西方貝塚A区全景, 西方貝塚B区全景	PL 6	第4号溝, 第1号包含層遺物出土状況①, 第1号包含層遺物出土状況②
PL 2	A区トレンチ, B区近景, 第1号住居跡	PL 7	第3号土坑, 第12号ピット, 第22号ピット, 第1号ピット群, 第1号井戸土層セクション, 第1号地下式竈遺物出土状況, 第6号溝土層セクション, 第7号溝
PL 3	第2号住居跡, 第2, 3号住居跡遺物出土状況, 第2, 3号住居跡貝ブロック出土状況	PL 8	第2, 3, 4号住居跡出土遺物
PL 4	第2号住居跡遺物出土状況, 第4号住居跡, 第34, 35号ピット	PL 9	ピット群, 第1号井戸, 第5, 6号溝出土遺物
PL 5	第1号井戸, 第1号地下式竈, 第2, 3号溝		

P L 10 遺構外出土遺物

P L 11 第4号住居跡，第1号井戸，第4号溝，第1号包含層，遺構外出土遺物

P L 12 第1，4号住居跡，第1号包含層，遺構外出土遺物

P L 13 第2，4号住居跡，ピット群，第1号井戸，第1号包含層出土遺物

P L 14 第1号包含層，遺構外出土遺物

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経過

主要地方道取手東線は、取手市と龍ヶ崎市・利根町を東西に結ぶという重要な役割を果たしてきた道路である。沿線地域の近年におけるめざましい発展は交通量の増加を招き、さらなる発展を目指すには道路網の整備を図ることが必要である。そうした中、茨城県は、主要地方道取手東線の道路拡幅工事の計画をした。よって当地区の道路改良工事は交通量の緩和のために計画されたものである。昭和61年8月27日、茨城県（竜ヶ崎土木事務所）は、茨城県教育委員会に対し、主要地方道取手東線道路改良工事予定地内における埋蔵文化財の有無について照会した。茨城県教育委員会は、平成7年5月2日に現地踏査を実施し、工事予定地内に西方貝塚が存在することを確認し、遺跡の取り扱いについて茨城県教育委員会と協議されたい旨回答した。そこで平成8年3月4日以降茨城県教育委員会は、茨城県（竜ヶ崎土木事務所）と遺跡の取り扱いについて協議を重ね、その結果、現状保存が困難であることから、平成8年3月11日、茨城県教育委員会が茨城県宛に、西方貝塚を記録保存とする旨を回答し、調査機関として、財団法人茨城県教育財団を紹介した。

茨城県教育財団は、茨城県と埋蔵文化財発掘調査に関する業務の委託契約を結び、平成8年8月1日から平成8年9月30日にかけて、西方貝塚の発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査経過

西方貝塚の発掘調査は、平成8年8月1日から9月30日までの2か月にわたって実施した。以下、調査経過について、その概要を月ごとに記述する。

- 8月上旬 発掘調査を開始するため、現場倉庫の設置、調査器材の搬入等の諸準備とともに、調査区内の重機による表土除去を1日から開始する。8日から遺構の確認調査を実施した。
- 中旬 19日には方眼杭打ち測量（茨城県建設技術公社に委託）を実施した。
- 下旬 22日にA区（県道取手東線「中妻」バス停付近）の遺構確認を終了し、土抗4基、溝9条、道路状遺構1基、ピット群1か所を確認した。また、23日からB区（県道取手東線「平石」バス停付近）の遺構確認調査を開始し、住居跡4軒、土抗3基、溝1条、井戸1基、ピット群1か所を確認した。A区と平行して遺構調査を実施した。
- 9月上旬 2日から、B区の遺物包含層の調査を開始し、縄文時代早期の土器片を多数検出した。
- 中旬 18日に航空写真撮影を行った。19日遺構調査を進めながら埋め戻し作業を行い、溝と重複していた地下式墳1基を確認した。
- 下旬 30日にはすべての現地調査を終了し、撤収作業を完了した。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

西方貝塚は、茨城県取手市大字小文間字中妻耕地4155番地の1ほかに所在している。遺跡のある取手市は、茨城県の最南部の利根川沿いにあり、東は利根町、龍ヶ崎市、西は守谷町、南は利根川を挟んで千葉県我孫子市、北は伊奈町、藤代町と境を接している。市域は、南側の利根川沿いの低地と北側の小貝川沿いの低地に挟まれて東西に細長く伸びた北相馬台地を骨格としており、面積は36.84km²である。市の中央部を、国道6号線とJR常磐線が並行してほぼ南北に通る。中央部から西に国道294号線と関東鉄道常磐線が通っている。交通条件の良さと首都圏40km内にあるところから工業団地と併せて大規模住宅団地化が進み、県南部の中堅商業都市としての発展がめざましい。

取手市の地形は、標高21～25mの北相馬台地と利根川水系の低地からなっている。利根川は、市の南側を西から東に流れ、千葉県との県境を形成し、小貝川は、蛇行しながら市の東部で利根川と合流している。北相馬台地は、利根川や小貝川の支流が入り込み複雑な地形を造り、市街地より東では、小文間の小台地や利根町の小台地などが孤立した台地として連なっている。台地の地層は、第四紀洪積世古東京湾時代に堆積した成田層が基盤層となり、下部から成田層下部、成田層上部、竜ヶ崎砂礫層、常総粘土層、関東ローム層の順で堆積している。堆積状況は、水平で単層であり断層はみられない。

西方貝塚は、小文間の小台地である利根川と小貝川の浸食谷に囲まれ、西部の小高い台地上にあり、標高約20mの台地の平坦部に立地する。調査前の現況は畑である。

参考文献

- 茨城県農林部農地計画課『土地分類基本調査 竜ヶ崎』1987年 12月
取手市史編さん委員会『取手市史 原始古代(考古)資料編』1989年 3月
取手市教育委員会『西方貝塚』1993年 9月
『茨城県教育財団文化財調査報告第107集』1996年 3月

第2節 歴史的環境

利根川、小貝川流域に所在する西方貝塚周辺の主な遺跡は、旧石器時代から確認されている。ここでは、取手市小文間を中心として時代ごとに記載し、歴史的要因について述べることにする。

旧石器時代の遺跡としては、粕原遺跡があり、細石刃核や細石刃、彫器及び削器等が出土している。また、西方貝塚〈1〉、大渡Ⅰ遺跡〈55〉の発掘調査の出土遺物中に旧石器時代と思われる石器や石器剥片が出土している。縄文時代草創期の遺跡としては、椋山・大日原遺跡〈33〉と市之代遺跡があり、燃糸文土器片や稲荷台式土器片が出土している。縄文時代早期の遺跡としては、西方貝塚、春日神社遺跡〈5〉、除戸Ⅰ遺跡〈17〉、東原遺跡〈27〉、市之代遺跡、堀尻遺跡〈53〉、大渡Ⅰ遺跡、堂ノ脇遺跡〈60〉、下高井向原Ⅰ遺跡〈70〉等があり台地の縁辺部及び小高い尾根上の台地に立地している。縄文時代前期の遺跡としては、西方貝塚、除戸Ⅰ遺跡、西浦Ⅰ遺跡〈20〉、椿山・大日原遺跡、向山貝塚〈34〉、上高井糠塚古墳〈40〉、白旗遺跡〈61〉等があり、早期の遺跡と比較して規模が大きくなる。縄文時代中期の遺跡としては、今回報告する西方貝塚、二本松貝塚、除

戸Ⅰ遺跡、陣谷原遺跡〈29〉、下高井向原Ⅰ遺跡、堀尻遺跡、大渡Ⅰ遺跡等がある。特に、西方貝塚は、昭和59年から61年まで断続的に調査が行われ、住居跡が環状に構成された、貝塚を伴う環状集落であることが分かっている。また、遺構に伴った人骨・石器・骨角器等を多数出土し、遺跡の重要性を高めている。縄文時代後期の遺跡としては、中妻貝塚〈2〉、谷耕地下貝塚〈3〉、西方遺跡〈4〉、春日神社遺跡、谷耕地遺跡〈7〉、行道南遺跡〈6〉、北中原A遺跡〈14〉、北中原B遺跡〈15〉、除Ⅰ遺跡、駒場Ⅰ遺跡〈22〉、大山Ⅰ遺跡〈25〉、前畑遺跡〈28〉、陣谷原遺跡、萬五郎輪遺跡、山王作遺跡〈37〉、台坪遺跡〈38〉、神明遺跡〈39〉、前新田遺跡〈41〉、大境遺跡〈42〉、稲向原Ⅰ遺跡〈43〉、稲向原Ⅱ遺跡〈45〉、古戸遺跡〈47〉、徳代八幡遺跡〈49〉、遠遺跡〈52〉、堀尻遺跡、大渡Ⅰ遺跡、竹ノ代Ⅰ遺跡〈57〉、東山遺跡〈59〉等がある。西方貝塚の北東にある中妻貝塚は、古くから著名な貝塚で、1914年に東京人類学会によって遠足会として簡単な調査がおこなわれている。貝塚の全体規模は、推定直径約150m、貝層の厚さは1~2mのヤマトシジミからなる環状貝塚である。縄文時代晩期の遺跡としては、中妻貝塚、神明遺跡等があり、大規模な後期の遺跡が継続したものであるが、遺跡数は急減している。

弥生時代の遺跡としては、市ノ代遺跡、大渡Ⅱ遺跡〈56〉、柏原遺跡等がある。当地域における弥生時代の遺跡は少ない。

古墳時代の遺跡としては、市之代古墳群、大渡Ⅱ遺跡、宗四郎坂古墳〈8〉、北中原Ⅱ遺跡〈16〉、除Ⅱ遺跡〈18〉、大山Ⅱ遺跡〈26〉、下高井向原Ⅰ遺跡、樺山・大日原遺跡、上高井塚古墳群、稲向原Ⅱ遺跡〈44〉、宿畑遺跡〈50〉、竹ノ代Ⅱ遺跡〈58〉等が確認されている。市之代古墳群は、小貝川の沖積地に独立した市之代の台地にあり、小貝川をその縁辺部に集中して立地している。現在、3基の前方後円墳と12基の円墳が確認されている。

奈良・平安時代の遺跡としては、戸田井遺跡〈9〉、中原遺跡〈11〉、南中原遺跡〈12〉、花輪台遺跡〈13〉、北中原Ⅱ遺跡、除Ⅱ遺跡、西浦Ⅱ遺跡〈21〉、駒場Ⅱ遺跡〈23〉、如何崎遺跡〈31〉、東遺跡〈32〉、向山Ⅱ遺跡〈35〉、貝塚新田遺跡〈36〉、稲向原Ⅳ遺跡〈46〉、佃Ⅱ遺跡〈51〉、堂ノ脇遺跡、新原敷遺跡〈62〉、出土遺跡〈63〉、守田耕地遺跡〈64〉、台宿遺跡等がある。

中世の遺跡としては、小文圃城跡〈10〉、大雁城跡〈19〉、大山遺跡〈24〉、大山Ⅱ遺跡、古戸城跡〈48〉、野々井城跡〈54〉等がある。下高井城跡は保存が良くその形状が確認できる。

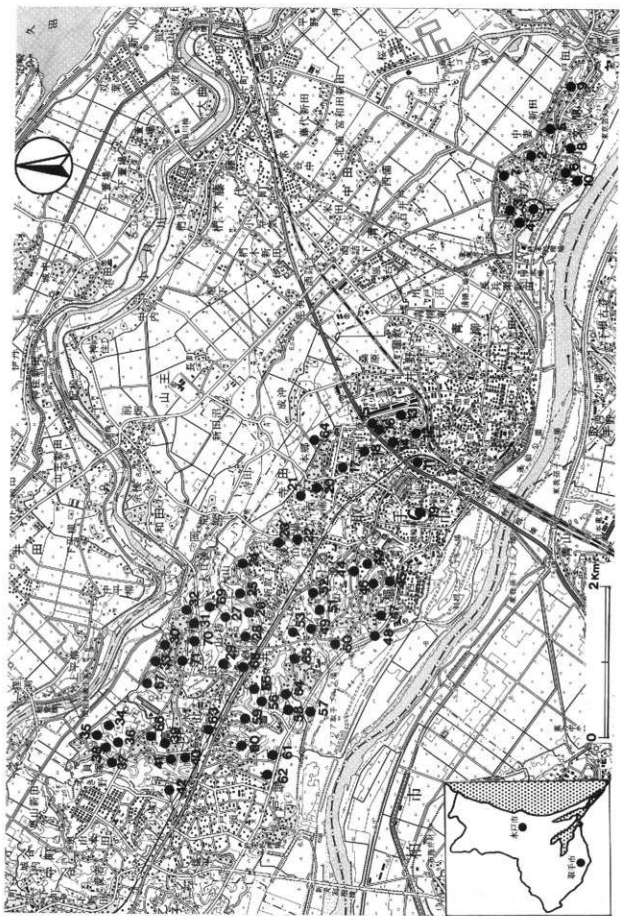
*本文中の〈 〉内の番号は、表1、第2図中の該当番号と同じである。

註・参考文献

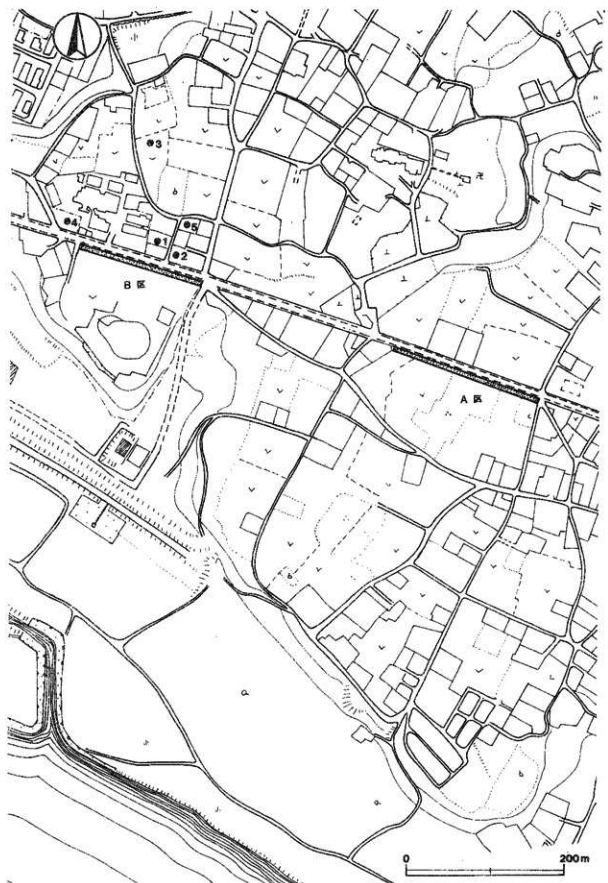
- | | | | |
|-----|------------|-----------------------|---------|
| (1) | 取手市史編さん委員会 | 『取手市史原初古代(考古)資料編』 | 1984年3月 |
| (2) | 取手市教育委員会 | 『取手市小文圃における縄文時代中期の貝塚』 | 1983年 |
| (3) | 取手市教育委員会 | 『茨城県取手市西方貝塚発掘調査報告書』 | 1993年 |
| (4) | 取手市教育委員会 | 『茨城県取手市中妻貝塚発掘調査報告書』 | 1995年 |
| (5) | 茨城県教育財団 | 『茨城県教育財団文化財調査報告第107集』 | 1996年3月 |
| (6) | 茨城県教育委員会 | 『茨城県遺跡地図』 | 1990年3月 |

表1 西方貝塚周辺遺跡一覽表

番号	遺跡名	県遺跡 番号	時 代					番号	遺跡名	県遺跡 番号	時 代				
			旧	縄	弥	古	奈・平				中世	旧	縄	弥	古
①	西方貝塚	2588		○				37	山王作遺跡	5604		○			
2	中妻貝塚	2581		○				38	台坪遺跡	5605		○			
3	谷耕地下貝塚	5569		○				39	神明遺跡	5606		○			
4	西方遺跡	5570		○				40	上高井塚古墳	5607				○	
5	春日神社遺跡	5571		○				41	前新田遺跡	5608		○			
6	台道南遺跡	5572		○				42	大境遺跡	5609		○			
7	谷耕地遺跡	5573		○				43	稲向原Ⅰ遺跡	5613		○			
8	宗四郎坂古墳	3620				○		44	稲向原Ⅱ遺跡	5614				○	
9	戸田井遺跡	5574				○		45	稲向原Ⅲ遺跡	5615		○			
10	小文間城跡	5575					○	46	稲向原Ⅳ遺跡	5616					○
11	中原遺跡	5577				○		47	古戸遺跡	5617		○			
12	南中原遺跡	5578				○		48	古戸城跡	5618					○
13	花輪台遺跡	5579				○		49	惣代八幡遺跡	4132		○			
14	北中原A遺跡	4077		○				50	宿畑遺跡	5619				○	
15	北中原B遺跡	4078		○				51	佃Ⅱ遺跡	5621					○
16	中原Ⅱ遺跡	5580				○		52	遠道遺跡	5622		○			
17	除戸Ⅰ遺跡	5581		○				53	堀尻遺跡	5623		○			
18	除戸Ⅱ遺跡	5582				○		54	野々井城跡	5624					○
19	大鹿城跡	2583				○		55	大渡Ⅰ遺跡	4133		○		○	
20	西浦Ⅰ遺跡	5584		○				56	大渡Ⅱ遺跡	4134				○	
21	西浦Ⅱ遺跡	5585				○		57	竹ノ代Ⅰ遺跡	5625		○			
22	駒場Ⅰ遺跡	5586		○				58	竹ノ代Ⅱ遺跡	5626				○	
23	駒場Ⅱ遺跡	5587				○		59	東山遺跡	5627		○			
24	大出遺跡	5588				○		60	堂ノ脇遺跡	5628					○
25	大出Ⅰ遺跡	5589				○		61	白旗遺跡	5629		○			
26	大出Ⅱ遺跡	5590		○				62	新屋敷遺跡	5630					○
27	東原遺跡	5591		○	○			63	出土遺跡	5631					○
28	前畑遺跡	5592		○				64	寺田耕地遺跡	5632					○
29	陣谷原遺跡	5593		○				65	西光寺前遺跡	5633		○			
30	下高井城跡	2584				○		66	神明貝塚	2585		○			
31	如何崎遺跡	5597				○		67	下高井貝塚	2589		○			
32	東遺跡	5598				○		68	柏原遺跡	—	○	○	○		○
33	梅山・大日原遺跡	5599		○				69	善五郎崎遺跡	5596					○
34	向山貝塚	5601		○				70	下高井向原Ⅰ遺跡	5594				○	○
35	向山Ⅱ遺跡	5602				○		71	下高井向原Ⅱ遺跡	5595		○			○
36	貝塚新田遺跡	5603				○									



第2圖 西方貝塚區邊遺跡分布圖



第3図 A・B区調査位置図

(取手市教育委員会調査区 1 昭和56年度 2 昭和57年度 3 昭和59年度 4 平成4年度 5 平成5年度)

第3章 遺 跡

第1節 遺跡の概要

西方貝塚は、取手市の東側にあり、利根川と小貝川に挟まれた細長い独立した標高約20mの台地上に位置している。調査区は、東側のA区（南北約5m、東西約140m）、西側のB区（南北約5m、東西約120m）に分かれ、総面積は1,903m²である。（第3図）現況は畑地である。当遺跡は、縄文時代及び中・近世にかけての複合遺跡で、遺跡の中心となる時期は縄文時代である。

今回の調査によって、調査区から住居跡4軒、土坑7基、地下式竈1基、井戸1基、溝9条、道路状遺構1条、柱穴群2群、地点貝塚9か所、遺物包含層1か所が検出されている。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に20箱出土している。遺物の大部分は縄文時代の浅鉢・深鉢である。また、地点貝塚から魚骨・獣骨・貝殻が確認された。中近世に関する遺物は、かわらけ、内耳土器片、陶磁器片、煙管、古銭などが出土している。その他、石器、瓦石が出土している。

第2節 遺構と遺物

1 竪穴住居跡

当遺跡から、縄文時代の竪穴住居跡4軒を検出した。以下、検出した住居跡とそこから出土した遺物について記載する。

第1号住居跡（第4図）

位置 調査B区中央、A3h₁区。

規模と平面形 長径4.26m、短径2.60mの楕円形である。

長径方向 N-N'

壁 壁高は1～9cmで、上部が削平されている部分が多く不明な点もあるが、北側及び南側の壁は緩やかに立ち上がっている。西側は擾乱を受け、壁は存在しない。

床 平坦であり、踏み締まりが強い。床面の中央部にはロームブロックが混じっている。

ビット 11か所（P₁～P₁₁）。P₁は径22cmの円形、深さ5cm、P₂は径22cmの円形、深さ10cm、P₃は径20cmの円形、深さ30cmで、P₄は長径24cm、短径18cmの楕円形で、位置や覆土状況から主柱穴であると考えられる。P₅・P₆・P₇は径16～22cmの円形であり、P₈・P₉・P₁₀・P₁₁は、長径22～26cm、短径16～20cmの楕円形で、性格不明のビットである。

炉 確認されなかった。

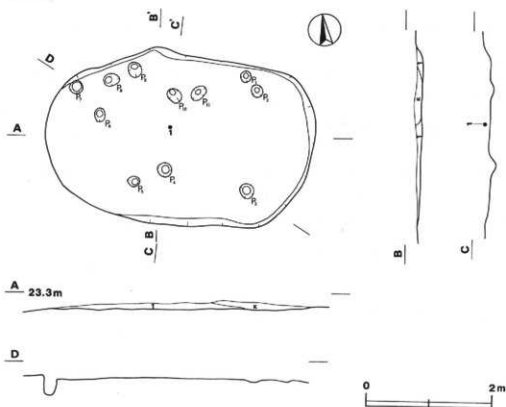
覆土 単一層で、自然堆積と考えられるが上部削平が著しい。

土層解説

1 褐色 ローム粒土・ローム小ブロック少量

遺物 覆土上層から、極少量の縄文土器片が出土している。1の石鏝は、中央部の床面から出土している。

所見 本跡の時期は、近辺の覆土から中期の縄文土器片が多数出土しているので、縄文時代中期中葉のものであると考えられる。



第4図 第1号住居跡実測図

第1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第5図1	石器	2.1	1.5	0.4	1.1	メノウ	床面	Q1

第2号住居跡 (第6図)

位置 調査B区西側, A1d₉区。

重複関係 本跡が第3号住居跡によって掘り込まれており, 本跡が古い。

規模と平面形 長径2.98m, 短径2.70mの隅丸長方形である。

長径方向 N-85°-W

壁 壁高は4~10cmで, 外傾して立ち上がる。

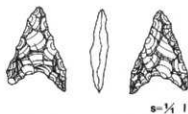
床 凹凸であり, 部分的に踏み締められている。

ピット 6か所 (P₁~P₆)。P₁は長径65cm, 短径50cmの楕円形, 深さ100cm,

P₂は長径28cm, 短径22cmの楕円形, 深さ50cm, P₃は長径57cm, 短径48cmの楕円形, 深さ100cmである。いずれもその形状や配列から主柱穴と考えられる。他は性格不明である。

炉 確認されなかった。

覆土 4層からなり, 自然堆積と考えられる。



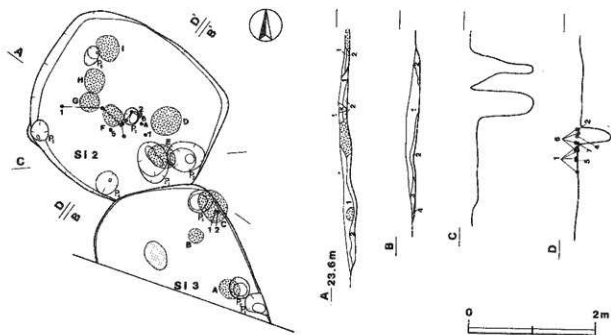
第5図 第1号住居跡出土遺物実測図

土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・貝殻片少量、ローム粒子微量、炭化粒子微量
 2 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、貝殻片少量
 3 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・貝殻片少量
 4 褐色 ローム小ブロック微量、ローム粒子・貝殻片少量

遺物 覆土中から多量の縄文土器片が出土している。1は阿玉台Ⅲ式の口縁部から胴部にかけての破片である。2は覆土中層、4・6・7は覆土下層から出土している。4は人面形把手である。6は波状・渦巻状の沈線を通らしている。8～17は阿玉台Ⅱ～Ⅲ式であり、半截竹管によって、複列の角押文や爪形文を施している。18～28は阿玉台Ⅳ式・勝坂式であり、隆起線に伴って沈線文を付随させている。

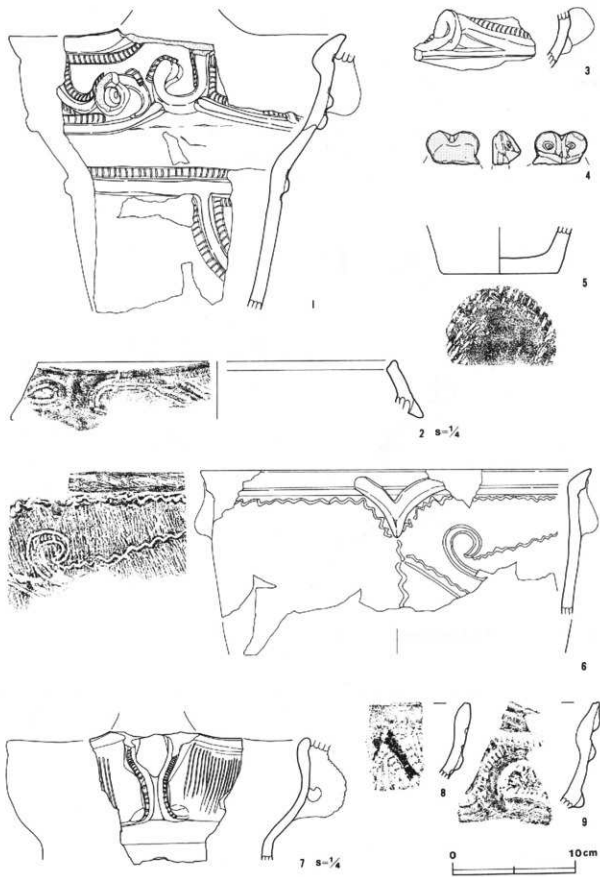
所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期（阿玉台Ⅲ～Ⅳ式期）と考えられる。



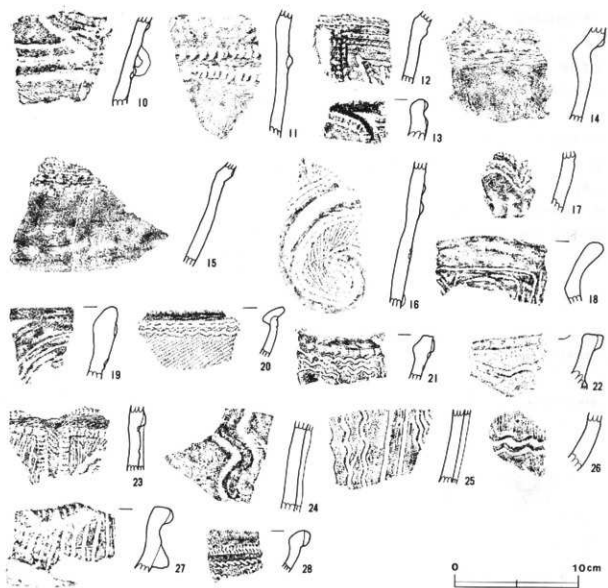
第6図 第2、3号住居跡実測図

第2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	測深値(cm)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・施成	備考
第7図 1	深鉢土器	A[27.4]	口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部は「く」の字状に彎曲し、	長石・石英・雲母	P1 40% 床面
	縄文土器	H(23.0)	円筒形の胴部に接続している。口縁部から胴部にかけて、隆帯に沿って幅広い爪形文が施されている。	暗赤褐色 普通	
2	深鉢土器	A[38.4]	口縁部の破片である。隆帯によって楕円形に区画され、半截竹管の工具によって複列の角押文が施されている。	砂粒・長石・石英 雲母・黒褐色	P4 5% 覆土中層
	縄文土器	B(6.3)		普通	
3	深鉢土器		口縁部と胴部の境が隆帯で区画されている破片である。渦巻状の小突起が表出されている。突起の側面には、連続爪形文が施されている。	砂粒・長石・雲母	P7 5% 覆土
	縄文土器			にぶい赤褐色 普通	



第7图 第2号住居跡出土遺物実測図(1)



第8図 第2号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	寸法(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
4	把手 縄文土器	—	口縁部に付されていたと思われる、人面形把手の破片である。目は一方から半分位孔が穿たれている。器面は磨耗している。赤彩されている。	砂粒・長石・雲母 にふい赤褐色 普通	P6 5% 覆土下層
5	深鉢土器 縄文土器	B(4.0) C 9.4	底部は平坦で、胴部は底部からやや外傾しながら立ち上がっている。器面は整形された無文で、底部外面に網代痕が見られる。	砂粒・長石・石英 灰褐色・普通	P5 5% 覆土上層
6	深鉢土器 縄文土器	A[31.8] B(11.8)	口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部は、外側に突き出す断面三角形の隆帯によって区画され、波状沈線文・渦巻状の沈線文・縦位の条線文などが見られる。	砂粒・長石・雲母 石英 にふい赤褐色 普通	P2 20% 覆土下層
7	深鉢土器 縄文土器	A[32.0] B(13.3)	大形の把手をもった口縁部の破片である。把手は環状把手で、連続角押文が施されている。縦位の沈線を口縁部から胴部にかけて通らしている。	砂粒・長石・雲母 褐色・普通	P3 10% 覆土下層

第3号住居跡 (第6図)

位置 調査B区西側, A1d3区。

層位関係 本跡が第2号住居跡を掘り込んでおり, 本跡が新しい。

規模と平面形 長軸 2.00m, 短軸 1.96mの楕円形と思われる。南側の半分は, 調査区域外のため調査できなかった。

長径方向 N-50°-W

壁 壁は一部が残存するのみで, 他は削平されている。壁高は10cm前後であり, 緩やかにやや外傾して立ち上がる。

床 炉の周辺に硬化した床面の一部を確認した。ほぼ平坦である。

ピット 3か所 (P₁~P₃)。P₁は長径35cm, 短径30cmの楕円形, 深さ15cm, P₂は長径36cm, 短径30cmの楕円形, 深さ10cm, P₃は長径40cm, 短径36cmの楕円形, 深さ100cmで, 位置や深さからいずれも主柱穴と考えられる。

炉 北西部に位置し, 長径50cm, 短径33cmの楕円形で, 如床が熱を受け赤変硬化しているのを一部確認できた。

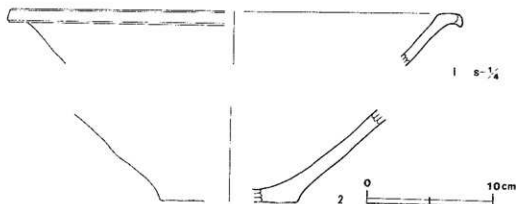
覆土 2層からなり, 自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒7・ローム小ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子無少量
- 2 暗褐色 ローム粒7・貝殻片少量, 焼土粒子無少量

遺物 1は無文の幅広い口縁部片で, 内・外面とも平滑な整形痕を残している。2はP₃の東側から出土した阿玉台IV式の胴部片であり, 胎土に雲母や石英粒の混入が見られる。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から縄文時代中期 (阿玉台IV式期) 以降と考えられる。



第9図 第3号住居跡出土遺物実測図

第3号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	寸法(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第9図 1	浅鉢土器	A(47.6)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部上位は無文。口唇部は厚手で緩やかに外反する。	砂粒・雲母 にふいふ褐色 普通	P8 3% 覆土上層
	縄文土器	B(8.2)			
2	浅鉢土器	B(7.5)	底部から胴部にかけての破片。平底。胴部は無文である。底部から外傾して立ち上がる。	砂粒・石英・雲母 黒褐色・普通	P9 10% 覆土上層
	縄文土器	C(10.8)			

第4号住居跡 (第10図)

位置 調査B区中央, A2e2区。

重複関係 本跡がビット42・44・46を掘り込んでおり, 本跡が新しい。

規模と平面形 長径4.00m, 短径2.20mの不整楕円形である。

長径方向 N-61°-W

壁 壁高は1~15cmで, 北側周辺が攪乱をうけ, 一部不明な点もあるが, 南側及び西側の壁は緩やかに立ちあがっている。

床 平坦であり, 特に硬く締まっている部分はない。床面の北西部にはロームブロックが混じっている。

ビット 9か所 (P₁~P₉)。P₁は長径60cm, 短径45cmの楕円形, 深さ60cm, P₂は長径50cm, 短径40cmの不整楕円形, 深さ95cm, P₃は径52cmの円形, 深さ130cm, P₄は径54cmの円形, 深さ105cm, P₅は長径46cm, 短径32cmの楕円形であり, P₆は長径44cm, 短径34cmの楕円形である。いずれもその形状や配列から主柱穴と考えられる。P₇~P₉は, 径20~32cmの円形で, 性格不明のビットである。

炉 確認されなかった。

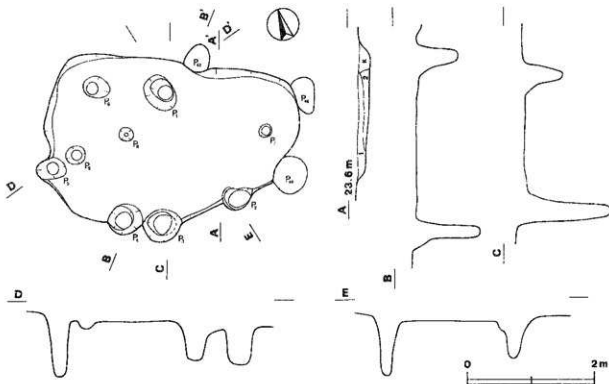
覆土 2層からなり, 自然堆積と考えられるが, 上部削平が著しい。

土層解説

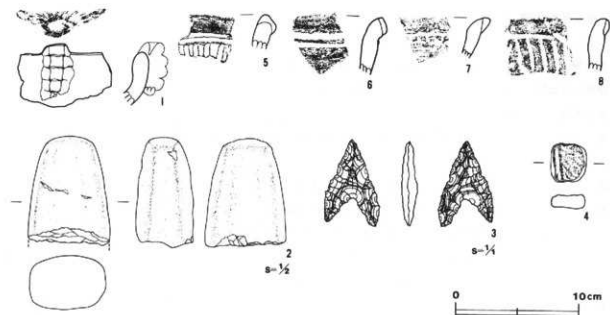
- 1 出層色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 崩層色 ローム粒子・ローム小ブロック少量, 炭化粒子微量

遺物 覆土上層から多量の縄文土器片が出土している。1は口縁部の破片で, 口縁に粘土紐を数段に貼り付けた小突起を有している。覆土上層から2の磨製石斧, 3の石鏃, 4の土製皿版が出土している。5~8は阿玉台式・勝坂式の口縁部の破片である。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から縄文時代中期 (阿玉台式期) と考えられる。



第10図 第4号住居跡実測図



第11図 第4号住居跡出土遺物実測図

第4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第11図 1	深鉢土器 縄文土器	B(5.0)	口縁部の破片である。口縁部直下には、短い胎土紐を横位に5段に貼付して作り出した小突起を有している。	長石・石英・スコリア 暗赤褐色 普通	P10 5% 覆土

図版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
2	磨製石斧	(5.8)	4.3	3.1	(121.0)	花崗岩	覆土上層	Q2 40%
3	石 錐	2.3	1.5	0.4	1.0	黒曜石	覆土上層	Q3 100%

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
4	土製円板	2.9	3.0	0.9	12.0	覆土上層	DP1

表2 西方貝塚住居跡一覧表

住居跡 番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	内部施設 ピット・土柱穴・竈	覆土	主な遺物	備考	
1	A3h	N-1°-W	楕円形	4.26×2.50	1~9	平坦	11 4	—	自然	石釧1, 貝1	新旧関係(古→新)
2	A1d	N-85°-W	隅丸長方形	2.98×2.70	4~10	四凸	6 3	—	自然	縄文土器片525(深鉢・浅鉢), 礎8	SI-2→本跡
3	A1d	N-50°-W	楕円形	2.30×1.55	1~10	平坦	3 3	炉	自然	縄文土器片3	本跡→SI-2
4	A2e	N-61°-W	不整形円形	4.00×2.20	1~15	平坦	9 6	—	自然	縄文土器片198(深鉢・浅鉢), 石釧1, 磨製石斧1	本跡→ピット42-44-46

2 地点貝塚

当遺跡B区からは縄文時代中期の所産と考えられる地点貝塚が、ごく小規模なブロック的なものとして、9か所検出されている。いずれも住居跡の覆土に堆積していたものである。第2号住居跡からは、6ブロック、第3号住居跡からは、3ブロック検出されている。貝塚のほとんどはヤマトシジミを主とするもので、ハマグリ、サルボウなどがこれに次いでいる。以下、住居跡から検出した貝塚について記載する。なお、貝類組成及び自然遺物等詳細については、付章を参照していただきたい。

第2号住居跡内貝塚 (第6図)

本貝塚は、住居跡内の覆土中の北西から南東にかけて形成されており、D～Iの6ブロックに分けられ、住居廃絶後の投棄と考えられる。貝層は、規模や堆積・分布の状態から、何回かの廃棄によって形成されたと考えられる。貝は遺物収納ケースで3箱分ある。Dブロックは径48cmの円形で、ブロックの中で一番大きい。貝種は、汽水系のヤマトシジミが圧倒的多数を占めており、ほかに、ハマグリ、サルボウ、アカニシなどが数点出土している。また、貝層中から鳥骨とクロダイ、スズキなどの魚骨が出土している。

本貝塚は、貝層中出土の土器から判断して阿玉台Ⅲ～Ⅳ式期以降に形成されたものと考えられる。

第3号住居跡内貝塚 (第6図)

本貝塚は、A～Cの3ブロックから成り、住居跡内の炉の北東側にかけて堆積していたものである。住居廃絶後の投棄と考えられる。Cブロックは長径54cm、短径40cmの楕円形でブロックの中で一番大きい。貝は遺物収納ケースで2箱分ある。Cブロックからは、阿玉台Ⅳ式期の口縁部が出土している。それぞれの貝層からは、汽水系のヤマトシジミのほか、鳥骨(ガン・カモ類)と魚骨が出土している。

本貝塚は、貝層中出土の土器から判断して第2号住居跡内の貝塚と同様、阿玉台Ⅲ～Ⅳ式期以降に形成されたものと考えられる。

3 土 坑

今回の調査によって、土坑54基(SK-1～54)を検出した。一覧表に掲載した7基以外は、長径50cm以下の土坑(ピット)であり、建物あるいは溝列等の可能性も考えられ、対応関係を把握することが困難なため、第1・2号ピット群と改称した。ここでは、形状や覆土の状態について特徴ある4基についてを記述し、他は一覧表に掲載する。

第3号土坑 (第12図)

位置 調査B区西側、A100区。

規模と平面形 長軸(1.26)m、短軸0.78m、深さ12cmの楕円形と考えられる。南側半分は、調査区域外のため調査できなかった。

長径方向 N-10°-E

壁 壁はロームで外傾して緩やかに立ち上がる。

底面 底面は硬く、平坦である。

覆土 土層断面は記録していないが、2層からなり、自然堆積と考えられる。

遺物 出土していない。

所見 出土遺物はないが、近辺の覆土から縄文時代中期の土器片が多数出土しているので、本跡の時期は、縄文時代中期と考えられる。

第4号土坑（第12図）

位置 調査A区東部，A13h1区。

規模と平面形 長軸1.70m，短軸1.60m，深さ22cmの不定形である。

長径方向 N-14°-E

壁 壁は外傾して緩やかに立ち上がる。

底面 ほぼ平坦である。

覆土 2層からなり，ロームブロックを含み人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック中量

遺物 出土していない。

所見 出土遺物はないが，遺構の形態から中世の墓蹟と考えられる。

第5号土坑（第12図）

位置 調査A区東部，A13h1区。

重複関係 第2号溝を掘り込んでおり，本跡が新しい。

規模と平面形 長軸1.00m，短軸0.65mの不整形円形である。

長径方向 N-23°-W

壁 壁高は20cm前後で，緩やかに外傾して立ち上がる。

底面 ほぼ平坦である。

覆土 2層からなり，人為堆積か自然堆積かは不明である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム中ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子微量，ローム小ブロック多量

遺物 本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 本跡は，遺物がなく時期は不明である。

第6号土坑（第12図）

位置 調査A区東部，A13h3区。

重複関係 第2号溝を掘り込んでおり，本跡が新しい。

規模と平面形 径0.96mほどの円形である。

壁 壁高は70cm前後で，ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 凹凸である。

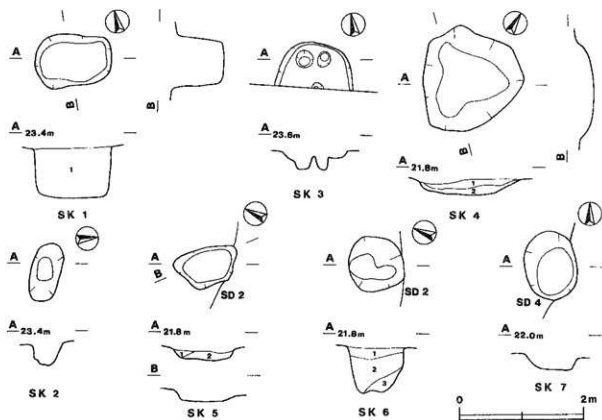
覆土 3層からなり，自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム中ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子微量，ローム小ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量

遺物 本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 本跡は、遺物がなく時期は不明である。



第12図 土坑実測図

表3 西方貝塚土坑一覧表 (第12図)

土坑 番号	位置	長径方向 (反軸方向)	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	主な遺物	備 考
				長径(m)×短径(m)	深さ(m)					
1	A1d6	N-70°-W	楕円形	1.20 × 0.80	80	外傾	平坦	自然	縄文土器片、軽石、陶器	
2	A1d8	N-77°-W	楕円形	0.72 × 0.48	34	緩斜	凹凸	自然		
3	A1e0	(N-10°-E)	(楕円形)	(1.26) × 0.78	12	緩斜	凹凸	自然		
4	A13h1	N-14°-E	不定形	1.80 × 1.60	22	緩斜	平坦	人為		
5	A13h1	N-23°-W	不整形円形	1.00 × 0.65	20	緩斜	平坦	不明		SD-2→本跡
6	A13h3	—	円形	0.96 × 0.92	70	外傾	凹凸	自然		SD-2・本跡
7	A13jr	N-5°-W	楕円形	1.10 × 0.84	20	緩斜	凹凸	自然		SD-4・本跡

4 ビット群

今回の調査では、ビット群2か所を検出した。建物あるいは横列等の可能性もあるが、対応関係を把握する事ができなかったため、ここではビット群として扱う。以下、その特徴について記載する。(第13～16図)

第1号ビット群

位置 調査B区西部、A1c₁区～A2f₅区。

重複関係 ビット42・44・46は、第2号住居跡を掘り込んでおり、ビットが新しい。

規模 南北約6m、東西約45mの長方形の範囲に39か所のビット(P₁～P₂₈、P₂₉～P₄₀)を確認した。ビットの平面は、径15～55cmの円形あるいは楕円形で、深さは15～85cmである。

覆土 土層断面の採図は2か所だけであったが、全体的に覆土は、褐色あるいは暗褐色にローム土が混入している。人為堆積と考えられる。

土層解説

P ₁		
1	暗褐色	ローム粒子多量、炭化粒子微量
2	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量
P ₂		
1	褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子微量
2	暗褐色	ローム小ブロック・焼土ブロック少量
3	暗褐色	ローム粒子・ローム小ブロック少量

遺物 1は縄文土器片(阿玉台Ⅳ式)の口縁部である。2～9は、数か所のビット内から出土した阿玉台Ⅱ～Ⅳ式の口縁部片や胴部片である。(第17図)

所見 多くのビットは、縄文時代の住居跡の周辺に存在していることもあって柱が立てられていたものと考えられるが、その性格は不明である。流れ込みと思われる縄文時代中期の土器片が出土しているが、正確な時期は不明である。

第2号ビット群

位置 調査A区西部、A13h₅・A13i₄・A13i₅区。

規模 東西8m、南北5mの範囲で8か所のビット(P₂₁～P₂₈)を確認した。ビットは、径30～65cmの円形あるいは楕円形で、深さは25～50cmである。

覆土 全体的に覆土は、黒褐色あるいは暗褐色にローム土が混入している。人為堆積と考えられる。

所見 本跡は、ビットの対応関係を把握できなくビット群として扱った。出土遺物もなく、時期は不明である。

ただし、本跡の南東約500mほどに小文間城跡があるため、それに伴う遺構である可能性が高い。



1/100

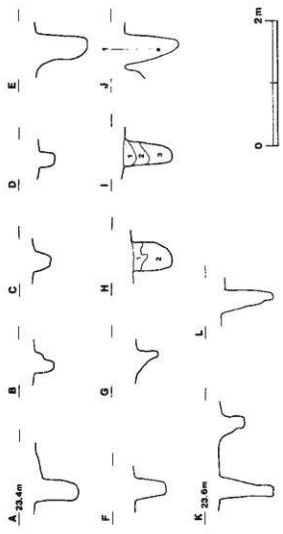
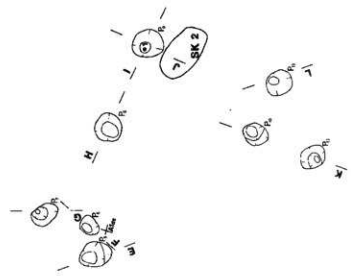
1/100



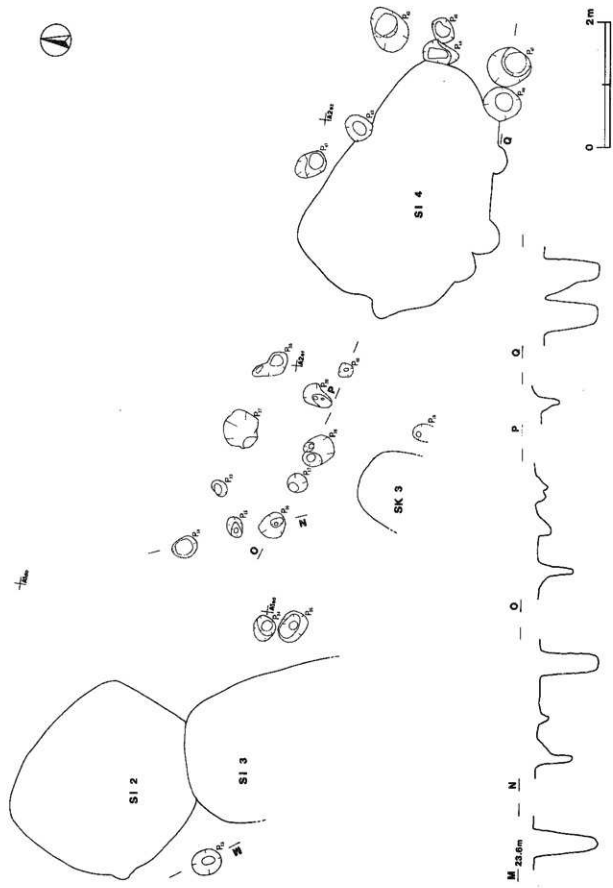
1/100



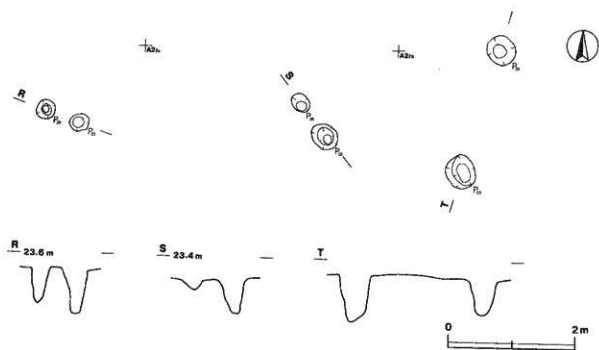
1/100



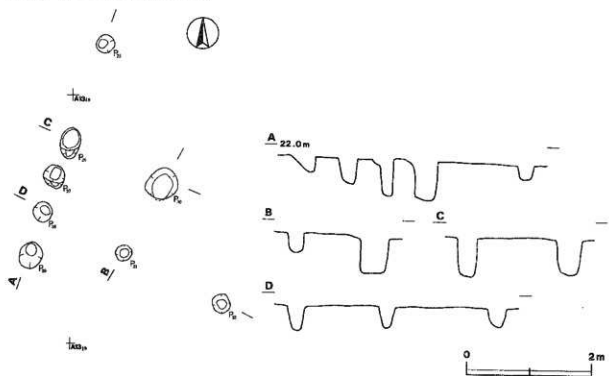
第13図 第1号ヒット群実測図(1)



第14図 第1号ヒット群実測図(2)



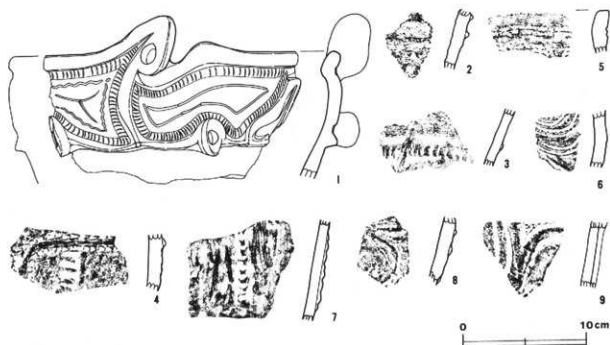
第15図 第1号ビット群実測図(3)



第16図 第2号ビット群実測図(4)

第1号ビット群出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第17図	深鉢土器	A(25.6)	胴部から口縁部にかけての破片、隆帯に沿って連続角押文が施され、その	灰石・石英・雲母	P11 10%
1	縄文土器	B(10.3)	内側の区面に波状比線文を施している。胴部は無文である。	にぶい赤褐色 普通	復土中解



第17図 第1号ピット群出土遺物実測図

5 地下式墳

今回の調査で、中世の地下式墳を1基検出した。以下、その特徴や主な遺物について記載する。

第1号地下式墳 (第18図)

位置 調査A区中央部、B14b区。

重複関係 竪坑南壁下部を第5号溝により掘り込まれているため、本跡が第5号溝より古い。

長軸方向 N-25°-E

竪坑 上面は長軸1.30m、短軸1.20m、深さ2.55mの隅丸方形と推定される。底面は平坦で、主室に向かって緩やかに傾斜している。

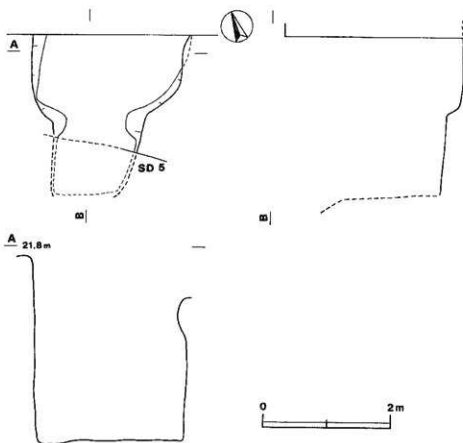
主室 北側が調査区外に延びているため正確な規模や平面形は不明であるが、長軸2.40m、短軸約1.40mの長方形と推定される。天井部は大部分が陥落しており、確認面から底面までの深さは約2.80mである。底面は平坦で、長軸2.15m、短軸約1.30mの長方形と推定される。壁面は垂直に立ち上がる。

壁 竪坑、主室ともほぼ垂直に立ち上がっている。

覆土 自然堆積である。土層の一部は、天井部の崩落土と思われる。調査期間の終了間際の調査だったために、土層断面を記録することができなかった。

遺物 竪坑上層から陶器片(常滑)1点が、主室の下層からアカニシ1点がそれぞれ出土している。

所見 本跡は遺物が少なく時期判断が難しいが、遺構の形態から中世と考えられる。



第18図 第1号地下式墳実測図

6 井戸

今回の調査で、調査B区から井戸を1基確認した（SE-1）。流れ込みの遺物が多く時期判断は難しい。以下、その特徴を記載する。

第1号井戸（第19図）

位置 調査B区東部、B3ay区。

規模と形状 確認面の上面は、長径が4.20m、短径3.60mの楕円形である。確認面から1.00mの深さまで急傾斜を持ち、確認面から1.50mまで掘り下げたが、底面には達しなかった。

覆土 24層からなり、ロームブロックが多量に含まれており、一部人為堆積の可能性があるが、その他は自然堆積とみられる。

土層解説

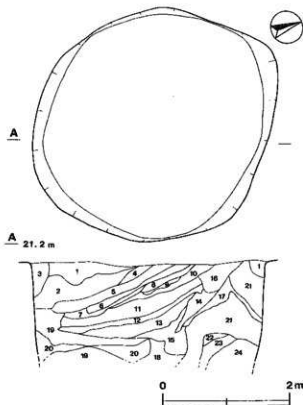
1	褐色	ローム小ブロック少量、炭化粒子微量	8	暗褐色	ローム小ブロック少量、炭化粒子微量
2	褐色	ローム中ブロック中量	9	褐色	ローム砂子・ローム小ブロック少量
3	褐色	ローム粒子少量、ローム中ブロック微量	10	暗褐色	ローム小ブロック少量、炭化粒子微量
4	褐色	ローム砂子・ローム小ブロック少量	11	褐色	ローム中ブロック多量
5	褐色	ローム中ブロック中量	12	暗褐色	ローム砂子・粘土中ブロック少量
6	褐色	ローム中ブロック中量、炭化粒子微量	13	暗褐色	ローム小ブロック多量
7	褐色	ローム砂子少量	14	褐色	ローム小ブロック中量

15	褐	色	ローム小ブロック・粘土粒子・炭化粒子少量
16	暗	褐色	ローム小ブロック少量
17	暗	褐色	ローム粒子・ローム小ブロック少量
18	褐	色	ローム小ブロック・粘土粒子少量
19	暗	褐色	ローム小ブロック少量、粘土粒子少量

20	褐	色	ローム小ブロック・粘土粒子少量
21	褐	色	ローム小ブロック少量
22	暗	褐色	ローム粒子・粘土粒子少量
23	褐	色	ローム小ブロック・粘土ブロック少量
24	淡	黄色	粘土ブロック少量、砂粒子少量

遺物 土師質土器片23点、陶磁器片6点等が出土している。いずれも細片で覆土中からの出土である。1～5・7・10・11は、覆土上層から中層にかけて出土し、6の陶鉢は常滑系で15世紀のものであると考えられる。8・9は煙管であり、覆土中層より出土している。12の寛永通宝は、覆土上層から出土している。13～15は同一個体の甕の陶器片で、波状の沈線が施されている。16は甕の陶器片の底部で、12弁の菊文花が施されている。17は摺鉢で、1単位10本前後の櫛歯状工具による櫛目が施されている。18は須恵器片である。(第20図)

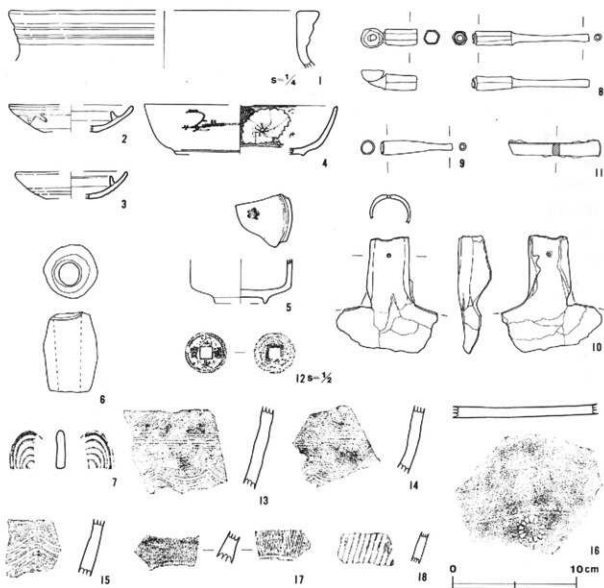
所見 本跡は、大型の井戸である。時期は、底面まで掘り下げることができなかったため確実な時期は不明であるが、出土遺物から近世と推定される。



第19図 第1号井戸実測図

第1号井戸出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第20図 1	大形 甕	A[32.6]	口縁部の破片。胴部は内彎し、口縁部はわずかに外反する。口縁部に3条の沈線を施している。	口縁部片・外面ロクロナデ。内面を調整するための指痕が一部残る。	砂粒・長石・石英 にぶい赤褐色	P12 5% 覆土
	灯明皿	A[10.0]	平底。体部から口縁部は直線的に外彎する。内面に径7cm、高さ0.8cmの円筒形の受部を有している。	ロクロ成形。内・外面に輪が施され、外面の一部が露出している。	砂粒 にぶい褐色	P13 20% 覆土
2	陶 器	B 2.2 C[4.4]	平底。体部・口縁部は直線的に外彎する。内面に径6cm、高さ0.7cmの円筒形の受部を有している。	ロクロ成形。内・外面に輪が施されている。	砂粒 褐色	P14 30% 覆土
	陶 器	B 2.2 C[4.0]	円筒形の受部を有している。		普通	
3	灯明皿	A[8.8]	平底。体部・口縁部は直線的に外彎する。内面に径6cm、高さ0.7cmの円筒形の受部を有している。	ロクロ成形。内・外面に輪が施されている。	砂粒 褐色	P17 10% 覆土
	陶 器	A[15.6]	体部から口縁部の破片。輪高台で、体部は内彎して立ち上がる。	染付、全面に透明釉。	砂粒・石英 明緑灰色	P17 10% 覆土
4	甕	B 4.0 C[10.2]	体部から口縁部の破片。輪高台で、体部は内彎して立ち上がる。	染付、全面に透明釉。	砂粒・石英 明緑灰色	P17 10% 覆土
	陶 器	B(3.6)	高台部から体部の破片。体部は内彎して立ち上がる。	高台内面に砂付着。全面に透明釉。	長石・石英 オリーブ灰色	P18 10% 覆土
5	陶 器	D[4.0] E 0.4			普通	瀬戸・美濃系



第20図 第1号井戸出土遺物実測図

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
6	陶 鉢	6.5	4.3	4.3	97	覆土上層	DP 2 口径1.7~2.2cm 常滑系
7	不明土製品	[2.2]	3.4	0.7	(12)	覆土上層	DP 10
8	煙 管	(14.0)	0.5~1.6	1.5	(22)	覆土中層	M 1 銅
9	煙管 嵌口	5.7	0.5~1.1	1.1	7	覆土中層	M 2 銅
10	鉄製品	9.4	8.2	0.5	90	覆土上層	M 3 器具
11	鉄釘	(7.5)	1.3	0.5	(16)	覆土上層	M 4

図版番号	種別	初 鑄 年		現存率 (%)	出土地点	備 考
		時代	年号(西暦)			
12	銅 銭	江 戸	寛永13年(1636)	100	覆土上層	M 5 寛永通宝

7 溝

当遺跡からは、9条の溝が検出されている。(SD-2~10)。SD-8~10は、平成8年9月の台風17号の影響で、調査途中での確認に終わった。ここでは、その形状や規模について記述し、他は、一覧表に記載する。

第2号溝 (第21図・付図)

位置 調査A区西部、A13h9区。

重複関係 第3号溝に掘り込まれているので、本跡が古い。

規模と形状 上幅0.9~1.3m、下幅0.3~0.8m、深さ0.20~0.30m、確認長9.5mである。

方向 N-77°-E

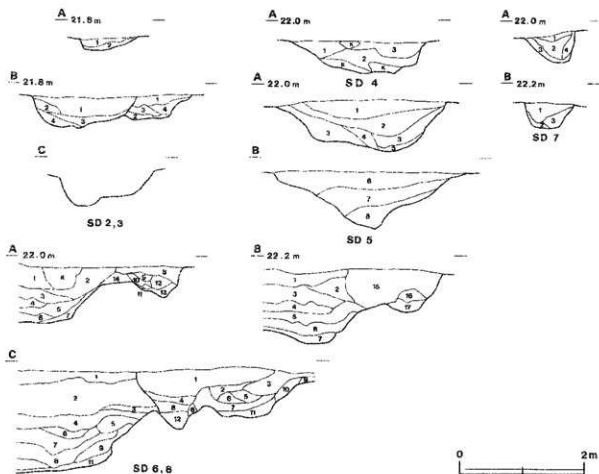
覆土 4層からなる自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・黒色土ブロック少量、ローム小ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量

遺物 流れ込みによる縄文土器片が、6点出土している。

所見 本跡は、第3号溝と交差しながら北東に向かってのびている。時期は不明である。



第21図 溝土層・断面実測図

第3号溝 (第21図・付図)

位置 調査A区西部, A13h2区。

重複関係 第2号溝に掘り込まれているので, 本跡が新しい。

規模と形状 上幅1.3~1.5m, 下幅0.2~0.5m, 深さ0.35~0.45m, 確認長10.2mである。

方向 N-41°-W

覆土 4層からなる自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・黒色土ブロック少量, ローム小ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック微量

遺物 流れ込みによる縄文土器片が, 4点出土している。

所見 本跡は, 第2号溝と交差した状態で, 南東の方向へ向かってのびている。本跡の時期は不明である。

第4号溝 (第21図・付図)

位置 調査A区西部, A13j7区。

重複関係 第7号土坑及び道路状遺構によって掘り込まれているので, 本跡が古い。

規模と形状 上幅1.6~2.2m, 下幅1.0~1.5m, 深さ0.30m, 確認長6.0mで, 断面形は~状である。

方向 N-26°-E

覆土 3層からなる自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック中量
- 3 褐色 ローム粒子・ローム中ブロック中量



遺物 1の古銭が覆土上層から, 流れ込みと思われる縄文土器片が24点出土している。

所見 本跡に伴う遺物が出土していないため, 時期は不明である。

第22図 第4号溝
出土遺物実測図

第4号溝出土古銭観察表

図版番号	種別	初 始 年		現存率 (%)	出 土 地 点	備 考
		時 代	年 号 (西暦)			
第22図1	銅 銭	不 明	不 明	60	覆土上層	M8

第5号溝 (第21図・付図)

位置 調査A区中央, B14b4区。

重複関係 本跡が地下式墳を掘り込んでいるので, 本跡が新しい。

規模と形状 上幅2.2~3.1m, 下幅0.3~0.7m, 深さ0.60~0.90m, 確認長49.0mと推定される。

方向 N-70°-W

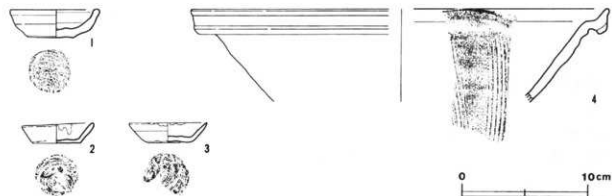
覆土 8層からなる自然堆積である。

土層解説

- 1 褐色 色 ローム粒子中量、ローム小ブロック微量
 2 褐色 色 ローム粒子・ローム小ブロック少量
 3 暗褐色 色 ローム小ブロック少量
 4 暗褐色 色 ローム小ブロック微量
 5 暗褐色 色 ローム粒子少量
 6 褐色 色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
 7 褐色 色 ローム小ブロック中量
 8 暗褐色 色 ローム小ブロック少量

遺物 1～4は本跡に伴うものと思われる。土師質土器片4点、陶器片5点のほか、流れ込みとみられる縄文土器片が45点出土している。

所見 本跡は、A区西側から東部調査区外に向かってのびている。土師質土器片が出土していることなどから中世以降の可能性がある。



第23図 第5号溝出土遺物実測図

第5号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第23図 1	土師質土器	A 6.6	体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部で外反する。	底部から体部ロクロナデ。底部は回転糸切り。	砂粒・長石・石英・スコリア にぶい褐色 普通	P19 100% 内面煤付着 覆土上層
		B 2.3				
		C 3.5				
2	土師質土器	A 5.6	体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部で外反する。	体部内・外面ロクロナデ。底部は回転糸切り。	砂粒 橙色 普通	P20 100% 口縁部に油煙 灯明直転用。覆土
		B 1.6				
		C 3.6				
3	土師質土器	A 6.2	体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	体部内・外面ロクロナデ。底部は回転糸切り。	砂粒・長石・石英 にぶい褐色 普通	P21 60% 口縁部に油煙 灯明直転用。覆土
		B 1.6				
		C 3.4				
4	襦鉢 陶器	A[33.0] B(7.3)	体部から口縁部の破片。口縁部は外反して立ち上がる。	1単位5本の櫛歯状工具による櫛目が施されている。	砂粒・石英 暗赤褐色 普通	P22 5% 覆土中層 鉄軸

第6号溝（第21図・付図）

位置 調査A区西部、B16i区。

重複関係 第8号溝に掘り込まれているので、本跡が古い。

規模と形状 確認長約66.0m以上である。

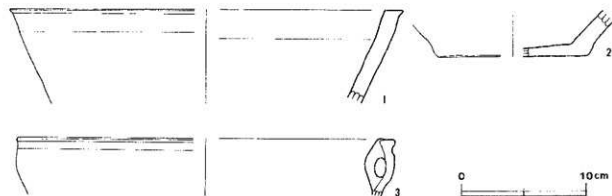
方向 N-65°-W

覆土 17層からなる自然堆積である。

土層解説		9	褐色	ローム小アブロック少量	
1	黒褐色	ローム粒子・ローム小アブロック少量	10	褐色	ローム粒子中量、ローム小アブロック多量
2	暗褐色	ローム粒子・ローム小アブロック多量	11	褐色	ローム粒子・ローム小アブロック少量
3	黒褐色	ローム粒子少量	12	褐色	ローム小アブロック中量
4	黒褐色	ローム粒子・ローム小アブロック少量	13	褐色	ローム小アブロック多量
5	暗褐色	ローム小アブロック少量	14	褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量
6	暗褐色	ローム粒子多量	15	褐色	ローム粒子少量、ローム小アブロック中量
7	暗褐色	ローム小アブロック多量	16	褐色	ローム小アブロック中量
8	暗褐色	ローム小アブロック少量	17	暗褐色	ローム小アブロック中量

遺物 1～3は覆土中から出土し、すべて本跡に伴うものと思われる。土師質土器片2点、陶器片7点のほか、流れ込みによる縄文土器片が167点出土している。

所見 トレンチ6か所の調査である。掘り込みがしっかりしており、他の溝と比べて深く、堀としても良い遺構である。本跡の南東約500mほどに小文間城跡があるので、堀の可能性も否定できない。内耳鍋が出土していることから中世の遺構である可能性が高い。



第24図 第6号溝出土遺物実測図

第6号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	測定値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第24図 1	陶器	A[31.4]	口縁部から胴部にかけての破片。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 にふい褐色 普通	P23 5% 覆土
		B(7.5)				
2	陶器	B(3.6)	底部から胴部にかけての破片。	内面に輪が施されている。外向下部 ヘラ削り。	砂粒・長石・石英 暗赤褐色 普通	P42 5% 覆土
		C[12.0]				
3	内耳鍋 土師質土器	A[30.2]	口縁部の破片。口縁部は下部の耳の 付け根が大きく凹む。耳は内壁後、 外反して口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 にふい赤褐色 普通	P24 5% 外堀全体取付者 覆土
		B(4.0)				

第7号溝 (第21図・付図)

位置 調査A区中央部、B16h1区。

規模と形状 上幅0.5～0.9m、下幅0.1～0.5m、深さ0.40m、確認長約53.0m以上である。

方向 N-70°-W

覆土 4層からなる自然堆積である。

土層解説		3	暗褐色	ローム小アブロック少量	
1	暗褐色	ローム粒子少量	4	褐色	ローム小アブロック中量
2	黒褐色	ローム粒子・ローム小アブロック少量			

遺物 陶器片2点のほか、流れ込みによる縄文土器片22点が出土している。

所見 本跡は、A区中央から東部に向かってのびている。トレンチ調査によって溝の方向性と規模を把握することができたが、本跡の性格や時期を判断する遺物等は出土しなかった。

第8号溝 (第21図・付図)

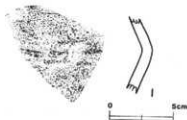
位置 調査A区東部、B16j4区。

重複関係 第6号溝を掘り込んでいるので、本跡が新しい。

規模と形状 上幅0.8～1.6m、下幅0.3～0.8m、深さ0.80m、確認長約6.8m以上である。

方向 N-15°-W

覆土 12層からなる自然堆積である。



第25図 第8号溝出土遺物実測図

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子・ローム小ブロック少量	7 褐色	ローム小ブロック中量
2 暗褐色	ローム粒子・ローム小ブロック中量	8 褐色	ローム粒子・ローム小ブロック少量
3 黒褐色	ローム粒子少量	9 褐色	ローム小ブロック少量
4 黒褐色	ローム粒子・ローム小ブロック少量	10 褐色	ローム粒子・ローム小ブロック中量
5 暗褐色	ローム小ブロック少量	11 褐色	ローム粒子・ローム小ブロック少量
6 暗褐色	ローム粒子中量	12 褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量

遺物 1は覆土上層から出土した常滑系の甕の肩部である。陶器片1点のほか、流れ込みによる縄文土器片38点、縄2点が出土している。

所見 本跡は、A区東側にあり、南北方向に向かってのびている。常滑系の甕の陶器片が出土していることから中世以降の可能性がある。

表4 西方貝塚溝一覧表

溝番号	位置	方向	形状	規模 (m)				壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(古→新)
				長さ	上幅	下幅	深さ					
2	A13区	北東～南西	直線状	(9.5)	0.9～1.3	0.3～0.6	0.20～0.30	緩斜	緩斜	自然	縄文土器片6点	本跡→SD-3, SK-5, 6 時期不明
3	A13区	北西～南東	直線状	(10.2)	1.3～1.5	0.2～0.5	0.35～0.45	緩斜	凹凸	自然	縄文土器片4点	SD-2→本跡 時期不明
4	A13区	北～南	直線状	(6.0)	1.6～2.2	1.0～1.5	0.30	緩斜	平所	自然	縄文土器片23点	本跡→SK-7, SF-1 時期不明
5	B14区	東～西	直線状	[49.0]	2.2～3.1	0.3～0.7	0.60～0.90	緩斜	緩斜	自然	縄文土器片45点, 土師質土器片4点, 陶器片5点	SD-6, 地下式竈→本跡 中世以降
6	B16区	東～西	L字状	[66.0]	—	—	—	緩斜	凹凸	自然	縄文土器片167点, 土師質土器片2点, 陶器片7点	本跡→SD-8 中世以降
7	B16区	東～西	直線状	[53.0]	0.5～0.9	0.1～0.5	0.40	緩斜	平所	自然	縄文土器片22点, 陶器片2点	時期不明
8	B16区	北～南	直線状	(6.8)	0.8～1.6	0.3～0.8	0.80	緩斜	凹凸	自然	縄文土器片38点, 陶器片1点, 縄2点	SD-6→本跡 中世以降
9	B16区	北～南	点線状	(6.0)	1.1～	0.3～	0.80	緩斜	凹凸	自然		時期不明
10	B16区	北～南	直線状	(6.0)	2.1～	1.5～	0.80	緩斜	凹凸	自然	台風17号の被害によって調査不能になる	時期不明

8 道路状遺構

調査A区から1条の道路状遺構が、確認された。時期は、不明である。しかし、第5号溝の覆土上に硬化面が確認されたことから、第5号溝よりも新しいと考えられる。以下、その特徴について記載する。

第1号道路状遺構（第26図・付図）

位置 調査A区中央、B14a1区。

重複関係 第5号溝の覆土上に硬化面を確認し、溝の一部を掘り込んであるので、本跡が新しい。

規模と形状 幅3m以上、確認長33m以上である。

方向 N-60°-W

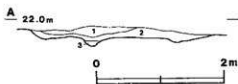
覆土 3層からなる自然堆積である。

土層解説

1	層	色	ローム粒子少量
2	層	色	ローム粒子・ローム小ブロック微証
3	層	色	ローム粒子少量、ローム小ブロック微証

遺物 本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 本跡は、南東に向かってのびている。非常に堅い硬化面である。時期は不明である。



第26図 第1号道路状遺構土層・断面実測図

9 遺物包含層

今回の調査で、標高の低い調査B区の東側（SE-1付近）から遺物包含層を検出した。検出した遺物包含層は、B3b区を中心に最大長14.6m、最大幅4.2mの範囲に広がっており、さらに調査区の南側の谷津項に向けて延びているものと考えられる。土層は暗褐色を基調とし、4層以上になる。各層とも、ローム粒子を少量含み、粘性が強い。

出土遺物は、縄文時代早期の貝殻条痕文系の土器群が主体を占め、次いで縄文時代中期の土器片が多い。その他、石鏃、打製石斧、土器片鏃、陶甌などが出土している。これらのうち特徴的なものについて掲載し、土器については解説し、他は一覧表で記載した。（第27～29図）

遺物包含層から出土した縄文土器片については、以下の分類基準を用いて解説する。

第1群 縄文時代早期の土器

第1類 無文土器

第2類 貝殻沈線文系土器

第2群 縄文時代前期の土器

第1類 関山式土器

第2類 浮島式土器

第3群 縄文時代中期の土器

第1類 阿玉台式・勝坂式土器

第2類 加曾利E式土器

第4群 縄文時代後期の土器

第1群 縄文時代早期の土器

第1類 無文土器

7～13は、口縁部の破片である。内・外面とも平滑な整形痕を残している。焼成が悪いため、表層で剥落しているものもある。胎土には微量の植物繊維と細かい砂粒を含んでいる。色調は黒色ないし橙褐色を呈している。

第2類 貝殻沈線文系土器

14～16は口縁部の破片で、表裏両面に条痕整形を施し、いずれも胎土中に繊維を含んでいる。焼成はやや不良である。29～47は、表面あるいは内面に比較的粗い条痕が不規則に施されている。いずれも胎土中に繊維を含んでいる。48～68は、表裏両面どちらかに条痕が施され、表面は細沈線で、裏面は沈線が粗く、横位や縦位あるいは斜位に施されている。胎土には、植物繊維および細かい砂粒を含んでいる。

第2群 縄文時代前期の土器

第1類 閉山式土器

69は口縁部片、70は胴部片で、どちらも器形が大きく外反する部位にループ文が施されており、その下段には正反の合の縄文を配する構成となる。いずれも胎土に繊維を含み、色調は黒色を呈している閉山式土器である。

第2類 浮島式土器

71～73は、いずれも口縁部の破片であり、口縁部下に隆帯を巡らし、平行沈線を引きつつ、その間に爪形状の刺突があり、その下部に棒状工具による斜め刻みを持っている。74・75は胴部片である。74は条線文を横に施している。75は半截竹管工具による平行沈線文を施している。これらは浮島式土器と思われる。

第3群 縄文時代中期の土器

第1類 阿玉台式・勝坂式土器

76～78は、円形の竹管文や角押文が施されており、阿玉台式土器・勝坂式土器のものと思われる。

第2類 加曽利E式土器

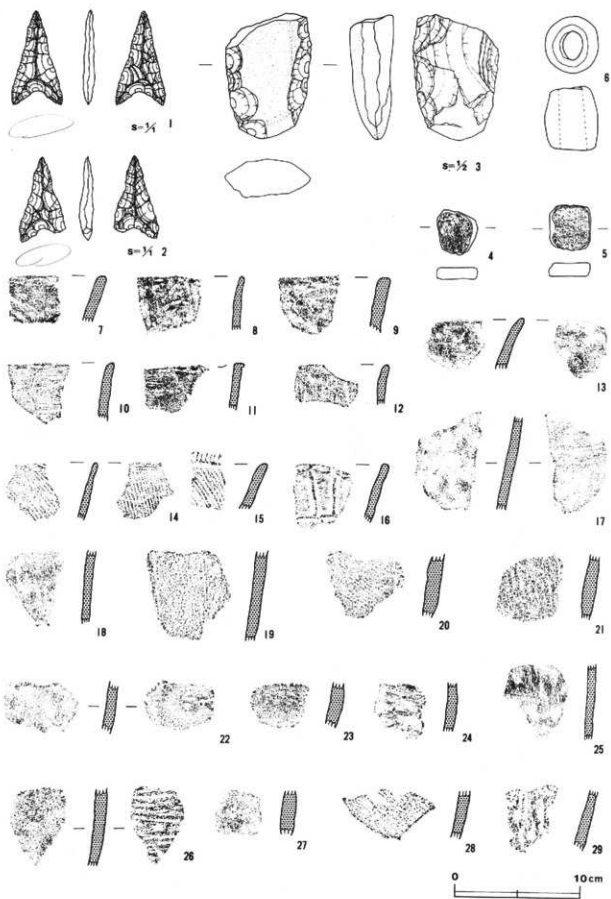
79～84は加曽利E式土器で、口縁部文様帯が格門区画文や渦巻文であり、胴部は、縦位の懸垂文が施されている。

第4群 縄文時代後期の土器

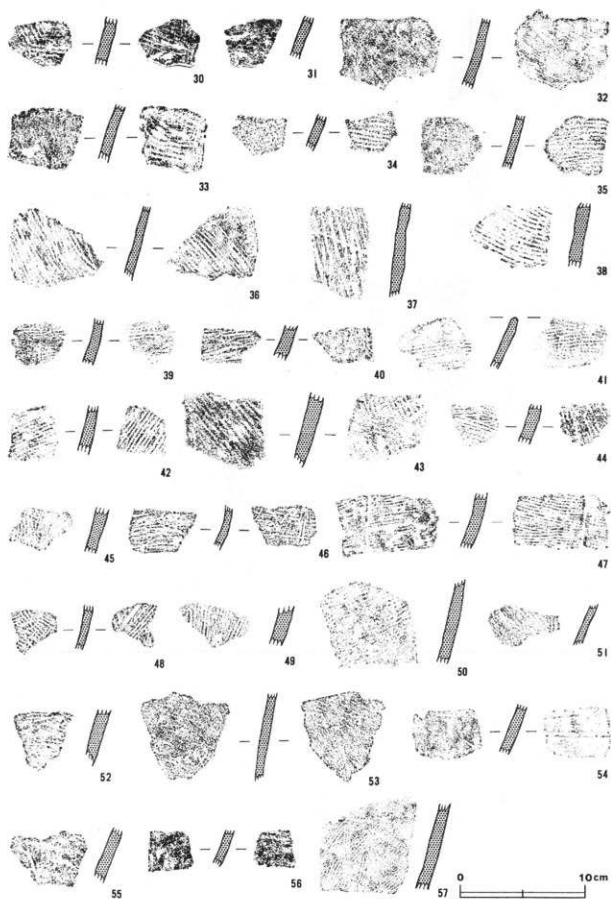
85は、加曽利B式の土器片である。沈線が格子状に施されている。

第1号遺物包含層出土遺物観察表

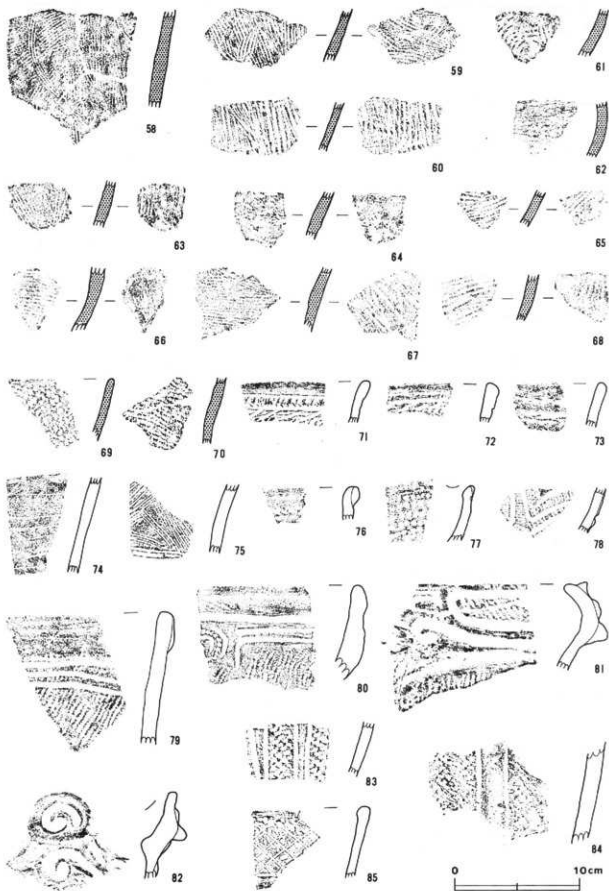
図版番号	種別	計測値				材質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第27回1	石 銀	2.6	1.3	0.3	0.6	チャート	覆土上層	Q 5 100%
	2 石 銀	(2.3)	1.1	0.4	(0.6)	チャート	覆土上層	Q 6 90%
3	打製石斧	6.6	4.5	2.5	87.0	砂 岩	覆土上層	Q 4



第27图 第1号遺物包含層出土遺物実測図(1)



第28图 第1号遺物包含層出土遺物実測図(2)



第29图 第1号遺物包含層出土遺物実測圖(3)

図版番号	器 種	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第27図4	土器片鉢	3.4	3.2	0.9	13	覆土上層	DP4
5	土器片鉢	3.3	3.6	1.0	19	覆土上層	DP5
6	陶 鉢	5.1	4.3	4.5	85	覆土上層	DP3 孔径1.9~2.3cm 常滑系

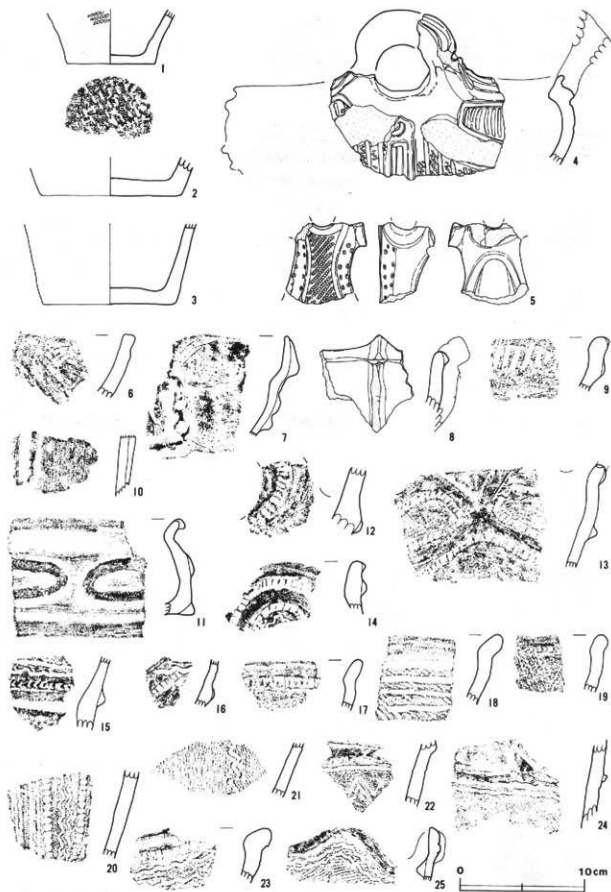
10 遺構外出土遺物

当遺跡からは、表土層及び遺構確認面から、遺構に伴わない遺物が出土している。ここでは、A区から出土した土師質土器、石鏡、砥石、土製陶版、古鏡、B区から出土した縄文土器片、羽釜片、陶器片、磁器片、石鏡、土製品、土器片鉢、洪式通家など特徴的なものを掲載した。土器については解説を加え、他は一覧表で記載した。(第30~33図)

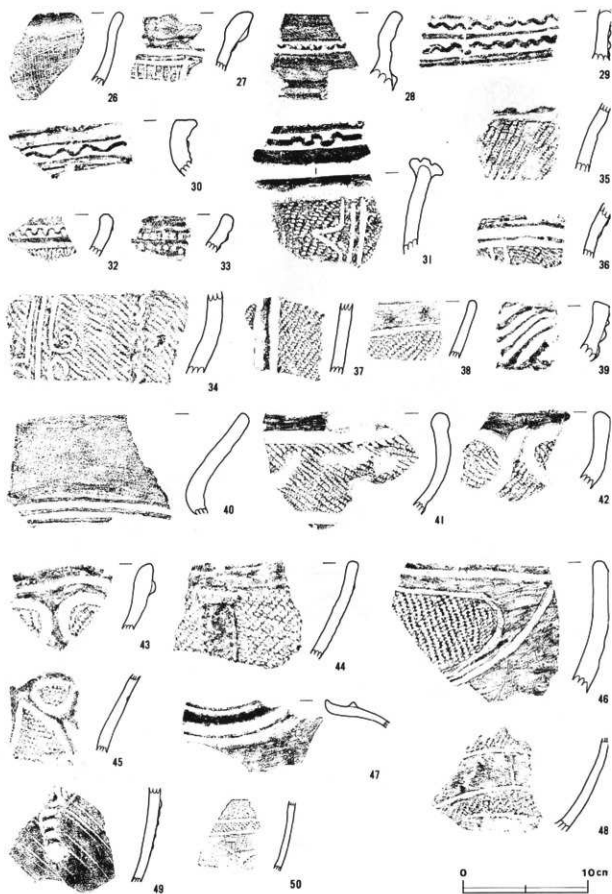
6~8、12~19、21~25は、縄文時代中期前葉から中葉の阿土台Ⅱ~Ⅳ式期の土器片である。6は脚状工具をもって2列の角押文が施されている。7は隆帯の上面に、丸棒状工具による押印が加えられている。8は隆帯が指でつまみ上げられたような状態である。11は口縁部で、隆帯で楕円形に区画し、器厚は7~10mmである。12~17は隆帯にそって連続角押文が施されている。18は口縁下部に横位の沈線が、隆帯に斜位の沈線が施されている。19は「V」字状に結節沈線文が施されている。20~25は縦位や横位に山形状の波状沈線文が施されている。11・20は勝坂式土器と思われる。26は口縁部片で、細い沈線が格子状に施され、その後斜位に深く沈線が1本施されている。28~31は半截竹管による平行沈線間に交互刺突による蛇行隆線を施している。中峙式段階と思われる。9・10、26~40は加曾利E式期土器と思われる。34は、胴部に変形剣先文が施された大木8b式土器と思われる。41~43、45・46は加曾利EⅡ式土器、47は、断面三角の隆起線により文様が描かれることから加曾利EⅣ式土器と思われる。48は、加曾利B式、49は安行式、50は安行3a式土器と思われる。

遺構外出土遺物観察表

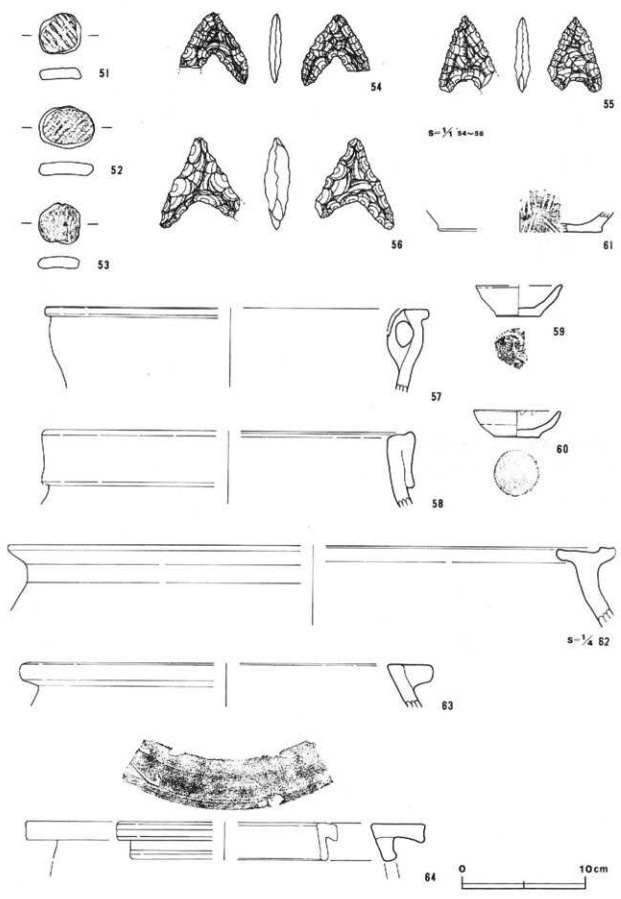
図版番号	器 種	計測値(mm)	撮影及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備 考
第30図 1	深鉢土器 縄文土器	B (4.4) C 6.9	胴部から底部にかけての破片。底部外面に刺突が見られる。LRの単節に深い褐色。	砂粒・包調・焼成 深い褐色 普通	P25 10% B区中央
2	深鉢土器 縄文土器	B (3.1) C 11.0	胴部から底部にかけての破片。底面は平型で、胴部の器面は整形された無文である。底部からやや外傾して立ち上がる。	砂粒・長石・石英・ 赤鉄 深い褐色 普通	P30 10% B区中央
3	深鉢土器 縄文土器	B (6.4) C 10.4	胴部から底部にかけての破片。底面は平型で、胴部からやや外傾しながら立ち上がっている。器面はやや粗く整形され、無文である。	砂粒・長石・石英 明赤褐色 普通	P37 10% B区中央
4	深鉢土器 縄文土器	A [25.8] B (7.1)	波状の1層部から胴部にかけての破片。隆線による区画がなされている。区画内には、縦位の沈線が施されている。	長石・スコリア 深い黄褐色 普通	P41 5% B区中央
5	折 手 縄文土器	長さ(6.5) 幅 (4.5)	口縁部に付されたと思われる折手の破片である。壺重文の両側に円形の竹管によって、刺突文が施されている。単節LRの縄文が片面に施されている。	砂粒・長石 灰褐色 普通	P31 5% B区中央



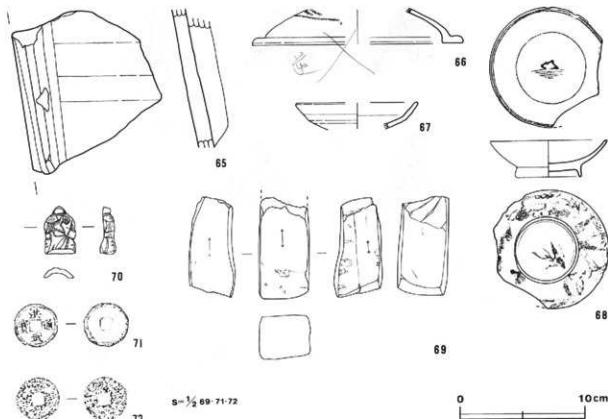
第30圖 遺構外出土遺物実測圖(1)



第31图 遺構外出土遺物実測図(2)



第32圖 遺構外出土遺物実測図(3)



第33図 遺構外出土遺物実測図(4)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第32-33図 57	内耳 陶 土師質土器	A[30.0] B(6.7)	口縁部から胴部の破片。体部は内彎しながら立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。	長石・雲母 に白い褐色 普通	P39 10% A区東側
58	壺 陶 器	A[29.4] B(6.1)	口縁部片で、折り返した縁帯は密着しており、口唇部はN字状を呈している。	口縁部内・外面横ナデ。外面自然釉。	砂粒・長石 暗赤褐色 普通	P34 5% B区東側 常滑系
59	小 皿 土師質土器	A[7.0] B 2.5 C 3.4	底部から口縁部にかけての破片。体部はわずかに内彎しながら立ち上がる。	内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア に白い褐色 普通	P33 10% A区東側
60	小 皿 土師質土器	A 7.0 B 2.1 C 3.6	体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部で外反する。	底部から体部クロコナデ。	砂粒 黒褐色 普通	P32 95% 口縁部に油煙 打撃痕見出 A区
61	楕 鉢 陶 器	B(1.6) C[13.0]	底部から胴部にかけての破片。底部から外彎して立ち上がる。	内面に1単位6本の鬚角状工具による指目が施されている。	砂粒・長石・雲母 に白い褐色 普通	P40 5% 内面黒色処理 B区東側
62	大 壺 陶 器	A[65.0] B(8.6)	口縁部から胴部の破片で、口縁部上位は有段になっている。	口縁部内・外面クロコナデ。外面には自然釉が施されている。	砂粒・長石・石英 暗赤褐色 普通	P26 5% B区東側 常滑系
63	壺 土師質土器	A[32.6] B(3.5)	口縁部から胴部の破片。口縁部は平らである。	内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英・ 糠・スコリア 黒褐色 普通	P35 5% 外面全体保存者 B区東側

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色澤・焼成	備考
44	甕 土師質土器	A [32.9] B (3.0)	口縁部片。胴の部分、背面に「L」字状。	内・外面顔ナデ。口縁部に黒褐色認められるが、文字は不明。	砂質・黄褐色 普通	P27 10% 内・外面スリ付 B区産物
45	甕 陶器	長さ[12.9] 幅(11.3)	笑口部片。笑口部片から内装して筒状になっている。	体部外面ナデ。体部内面に輪状模様を施す。	砂質・長石・赤褐色 普通	P28 5% B区産物
66	甕 陶器	A [18.6] B (2.6)	体部から口縁部の破片。体部は内装気味に立ち上がり、口縁部で強く反する。	安年。口縁部内・外面口唇ナデ。	砂質・長石・赤褐色 普通	P29 10% 内・外面透明釉 B区産物
67	小甕 陶器	A [9.6] B (2.6)	底面から口縁部の破片。体部は内装しながら立ち上がる。	内・外面全体に施。体部外面に口唇口目。	砂質・長石 普通	P28 10% B区産物
68	小甕 陶器	A 3.4 B 2.9 C 5.2 D 0.6	底面から口縁部片。体部は内装して立ち上がり、口縁部に至る。	安年。内・外面全体に透明釉。	砂質・石英 白色 普通	P28 85% B区産物

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
332-3254	石 甕	(1.8)	1.8	0.3	(0.77)	チャート	B区表土採集	Q10 90%
55	石 甕	(2.1)	1.4	0.3	(0.8)	黒曜石	B区表土採集	Q9 90%
56	石 甕	(2.4)	2.1	0.6	(2.0)	黒曜石	A区表土採集	Q7 90%
69	甕 石	(5.3)	2.7	2.3	(58.0)	凝灰岩	A区表土採集	Q8 30%

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
332-3255	土製円筒	3.3	3.3	0.9	12	A区表土採集	DP7
58	土製円筒	3.3	4.4	1.1	19	A区表土採集	DP9
59	土器片鏝	3.3	3.2	0.9	13	B区表土採集	DP8
70	土製人形	3.7	2.1	1.2	6	B区表土採集	DP6

図版番号	種別	銘 年		現存率(%)	出土地点	備考
		時代	年号(西暦)			
332571	銅 銭	明	明洪武元年(1368)	100	B区表土採集	M6 洪武通宝
72	銅 銭	不明	不明	100	A区表土採集	M7

第3節 ま と め

今回の調査によって、当遺跡から縄文時代中期の竪穴住居跡4軒、住居内地点貝塚9か所、土坑1基、早期を中心とした遺物包含層1か所、中世の土坑1基、溝3条、近世以降の井戸1基、道路状遺構1条、その他の土坑5基、溝6条、ピット群2か所を検出した。ここでは、主として縄文時代及び中・近世の遺構と出土遺物についての概要を述べ、まとめとする。

縄文時代

当遺跡の中心となる時期で、竪穴住居跡4軒を検出した。縄文時代中期前半の住居跡である。平面形は、楕円形や隅丸長方形であり第3号住居跡を除いて、炉を持たない住居跡である。遺物は、半截竹管によって爪形文を施している阿玉台Ⅲ式、沈線文を施している阿玉台Ⅳ式が出土している。また、人面形の赤彩された把手が出土している。地点貝塚は、第2、3号住居跡内に、ごく小規模なブロック的なものとして9ブロック存在した。ヤマトシジミを主として、魚骨(クロダイ・スズキ)、鳥獣骨(ガン・カモ類、シカ・イノシシ)等が検出された。当時の利根川河口域の生産活動を知る貴重な資料を提供した。

調査B区の市側谷津頭付近から出土した遺物包含層では、早期後葉の貝殻条痕文系を主とした茅山式土器、前期の浮島式、中期の阿玉台式、加曾利E式、後晩期の土器等長い時期にわたって出土している。その他、石鏃、打製石斧、土器片鏃、中世の常滑系の陶鍾が出土している。遺物の出土状況については、層ごとに時期をとらえることができなかった。

奈良・平安時代

平安時代の須恵器片が1点出土している。胎上に雲母を含んでいることなどから、新治窯跡群から供給された製品の可能性がある。

中 世

A区から中世の土坑1基、溝2条を検出した。常滑系の甕、陶鍾、内耳鍋等が出土し、遺物から15～16世紀にかけての遺構であると思われる。調査区の南東500m付近に小文間城跡があり、城との関連をうかがわせる。

近 世

近世以降の井戸1基、道路状遺構1条を検出し、遺構確認面及び覆土から陶器片、磁器片、陶鍾、紙石、寛水通宝、煙管等が出土している。中世の製品も含まれているが、大半は近世の製品と思われる。馬骨片がA区第4号溝の確認面から出土しており、近世以降のものである可能性が高い。

参考文献

- ・ 取手市史編さん委員会『取手市史 原始古代(考古)資料編』1989年3月
- ・ 西村正衛『石器時代における利根川流域の研究—貝塚を中心として—』1984年12月
- ・ 縄文時代研究班「関東地方における縄文時代中期の「有段式竪穴遺構」について(『研究ノート5号』)」
茨城県教育財団 1996年6月
- ・ 中近世研究班「茨城の中世かわらけについて(『研究ノート4号』)」茨城県教育財団 1995年6月

付 章

西方貝塚出土の動物遺体

国立歴史民俗博物館 西本 豊 弘
国学院大学大学院生 伊 藤 良 枝

西方貝塚の1996年の発掘調査では、住居跡のくぼみの数か所に貝殻が捨てられていることが分かった。それらの貝ブロックには魚骨や鳥獣骨が少量含まれていた。その内容を出土地点ごとに以下に記載した。これらの動物遺体の時期は、出土した土器から見て縄文時代中期と中世以降と思われる。ここでは、それらの鳥獣骨の内容を中心に簡単に報告する。

1 貝類

貝ブロックに含まれる貝類の種類の数は数えていないが、すべてのブロックでヤマトシジミが主体であった。おそらく各ブロックともに95%以上はヤマトシジミであろう。ヤマトシジミの大きさは殻長25前後のものを主体として、殻長40程度の大きなものまで含まれていたが、大きなものは少ない。その他の貝類では、アカニシ・ウミナナ・サルボウ・イツシジミ・ハマグリが少量見られ、シオフキ・マガキ・サラガイ・ミルクイ・オオノガイが種に見られた。住居跡複上中からは、キセルガイ類も採集されているが、縄文時代のものかどうか疑わしい。

なお、E・Fブロック貝層の約2分の1の貝殻は灰色から黒色を呈しており、焼いていた。意図的に貝を焼いたのか偶然焼けたのかは分からない。また、Fブロック貝層から出土した大きなハマグリは、腹縁が磨耗していることから、加工品として利用されたものと推測された。

2 魚類

魚骨は意外に多く出土した。種が判明したものでは、クロダイとスズキが多い。その他にエイ類・マダイ・コナギ・ボラが少量見られた。いずれも河口域で捕獲される種である。

3 鳥類

種と部位が不明な破片が多いが、ガン・カモ類とキジが見られた。ガン・カモ類ではもっともおおきなハクチョウをはじめとして、小さなカモ類まで数種は含まれるであろう。キジは1点だけであった。

4 哺乳類

出土量は少ない。シカ・イノシシ・イヌ・ウマが認められた。シカ・イノシシは、縄文時代のものと思われるが、出土量は少ない。イヌは、下股の骨が一括して採集された。下顎第1後臼歯も採集されたおり、同一個体の可能性がある。ほぼ完存の脛骨をみると、太くて、左右の湾曲が少なく、長軸に沿って真直ぐであり、新しいタイプのイヌである。現代犬の可能性が高い。ウマは2体分の頭蓋骨と歯である。いずれの歯もかなり大きく、中世以降、おそらく江戸時代以降のウマであろう。

まとめ

以上、この遺跡出土の動物遺体を見て来たが、貝類ではヤマトシジミが主体であり、しかもそれらが焼けていたことが注目される。また、魚類が多いことも特徴である。ヤマトシジミが採れる河口域で、クロダイやスズキなどを盛んに捕獲していたのだろう。ガン・カモ類がかなり出土していることも、河口域での縄文人の生業活動を示している。

表1 動物遺体出土内容 (L:左側, R:右側, 長さの単位はmm)

SI-2 ビット内	種不明トリ 椎骨 2 トリ骨片 1 陸獣骨片 1 魚類骨片 50
SI-2 Dブロック	陸獣骨片 2 魚類骨片 50
SI-2 Eブロック	タイ類 椎骨 1 スズキ 主鰓蓋骨破片 2 スズキ 副鰓形骨 1 スズキ 上顎骨 R 1 スズキ 前上顎骨 L 1 スズキ 関節骨 R 2 魚類骨片 100 カモ中小 椀骨 L 中間 トリ骨片 4 焼骨 1 含む 陸獣骨片
SI-2 Fブロック	エイ目 尾棘 タイ類 椎骨 3 クロダイ 上顎骨 R 1 クロダイ 前上顎骨 R 2 クロダイ 歯骨 R 1 マダイ 関節骨 R 1 スズキ 上顎骨 R 1 スズキ 前上顎骨 L 1 R 1 魚類骨片 200
SI-2 Gブロック	クロダイ 前上顎骨 L 1 ボラ 主鰓蓋骨 L 1 魚類骨片 1 種不明トリ尺骨 R 上 キジバトとよく似ているが、一回り大きい。 イノシシ 大腿骨 R 中間部骨片

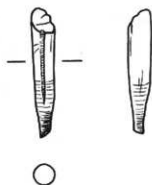


図1 第2号 住居跡内Eブロック
シカ・中手・中足骨製ヤス

ハクチョウ	脛骨 L 中間 犬の噛み痕あり
カモ小	尺骨 R 上
カモ小	胸骨
キジ	椀骨 L 上 被火し白色化
	トリ骨片 9
イノシシ	下第1切歯 R 摩滅なし 幼獣
ノネズミ	切歯 1
ノネズミ	上腕骨 L
ノネズミ	大腿骨 R
陸獣骨片	16

S I - 2 Hブロック 魚類骨片15

S I - 2 Iブロック及び覆土 カモ小 中手骨 完存 長さ30.1
 カモ小 上腕骨 R 下
 カモ中小 尺骨 L 中間
 カモ中 烏口骨 L 中間
 トリ骨片7
 イヌ 大腿骨 L 骨頭、遠位端のみ
 イヌ 大腿骨 R 骨頭のみ
 イヌ 仙椎
 イノシシ 下顎第2後臼歯 R 摩滅ナシ 若獣 計測不可能
 陸獣骨片75 焼骨2含む
 陸獣肋骨片5
 エイウ 尾椎2
 クロダイ 上顎骨 L 2 R 6
 クロダイ 歯骨 R 5
 クロダイ 主髁蓋骨 L 1 R 1
 クロダイ 関節骨 R 1
 タイ類 椎骨4
 スズキ 上顎骨 R 1
 スズキ 主髁蓋骨 R 1
 スズキ 歯骨 L 1 R 3
 魚類骨片59

S I - 3 Aブロック

クロダイ 前上顎骨 L 3 R 1
 クロダイ 歯骨 L 1
 タイ類 椎骨1
 スズキ 上顎骨 R 1
 スズキ 前髁蓋骨 L 1
 スズキ 主髁蓋骨 R 1
 コチ 前髁蓋骨 L 2
 魚類骨片100
 種不明トリ 鎖骨
 種不明トリ 尺骨 R 中間 ネズミ噛み痕あり
 トリ骨片6
 イノシシ 下顎第2切歯 L 成獣
 陸獣肋骨片1
 陸獣骨片10

S I - 3 B・Cブロック	カモ中 中手骨 R 下
	イヌ 寛骨 L (以下同一個体, 成獣小型)
	イヌ 大腿骨 L 上
	イヌ 脛骨 L はほぼ完存 長さ 111.0± 下幅16.7
	イヌ 腰椎 2
	イヌ 尾椎 1
	陸獣骨片 4
	魚類骨片 2

B区遺構外 陸獣骨片30

ウマ (以下同一個体, 成獣)	長さ		
上顎第2前臼歯 R	33.1	下顎第2前臼歯 R	33.6
下顎第4前臼歯 L	29.2	第4前臼歯 R	29.3
第3後臼歯 L	32.7	第3後臼歯 R	33.1

S D - 4 ウマ (以下同一個体, 成獣)

上顎第1切歯 L R		上顎第2前臼歯 L	34.7
第2切歯 L R		第3前臼歯 L	28.1
第3切歯 L R		第4前臼歯 L	27.8
		第1後臼歯 L	25.2
下顎第1切歯 L R		第3後臼歯 L	26
第3切歯 L			
下顎第2前臼歯 L	32.6	下顎第2前臼歯 R	計測不可
第3前臼歯 L	29.6	第3前臼歯 R	30.2
第4前臼歯 L	28.1	第4前臼歯 R	28.3
第1後臼歯 L	26.4	第1後臼歯 R	26.4
第2後臼歯 L	26.0	第2後臼歯 R	26.3
第3後臼歯 L	計測不可	第3後臼歯 R	29.8

なお、骨の加工品が1点見られた(図1)。S I - 2 Eブロックから出土したもので、現存長31.7mmである。表面はよく研磨されているが、1面に1本の浅い溝が認められる。このことから、この資料は、シカの中手骨または中足骨を加工したものであることが分かる。両端は欠損しており、器体の全面には軸に平行した研磨痕が見られる。残存部の下半分は少し細くなっており、その部分に、軸に対して直交する窪みが数条にわたって微かに見られる。このことから、下半分は着柄された部分であると考えられるので、この加工品はヤスの一部分、おそらく、3本組み合わされて用いられるヤスの中央部の部品と推定される。このタイプの資料は、縄文時代後期・晩期に一般的に見られるものである。この資料は、骨質が堅く、少し茶色を呈していることから、おそらく火を受けていると思われる。

写 真 图 版



西方貝塚遠景



西方貝塚A区全景



西方貝塚B区全景

PL 2



A区 トレンチ



B区 近景



第1号住居跡



第2号住居跡



第2, 3号住居跡
遺物出土状況



第2, 3号住居跡
貝ブロック出土状況

PL 4



第2号住居跡
遺物出土状況



第4号住居跡



第34, 35号ピット



第1号井戸



第1号地下式塚



第2, 3号溝

PL 6



第4号溝



第1号包含層遺物出土狀況 (1)



第1号包含層遺物出土狀況 (2)



第3号土坑



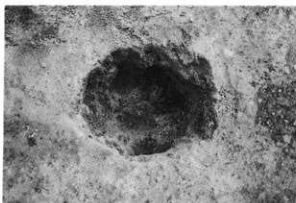
第1号井戸土層セクション



第12号ビット



第1号地下式塚遺物出土状況



第22号ビット



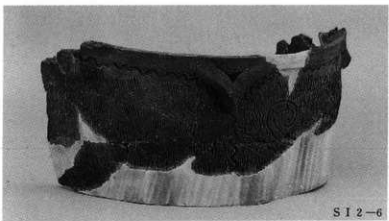
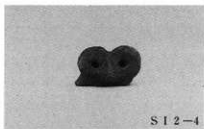
第6号溝土層セクション



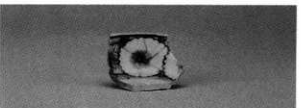
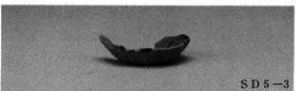
第1号ビット群



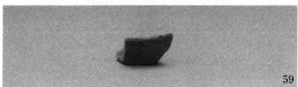
第7号溝

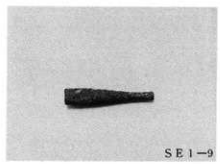
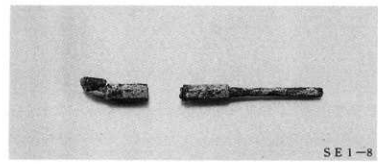
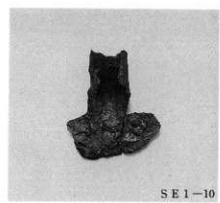
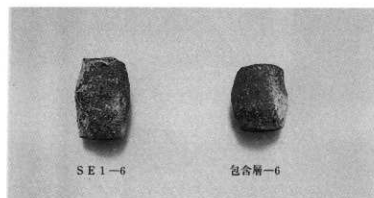
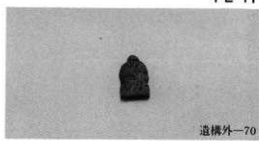
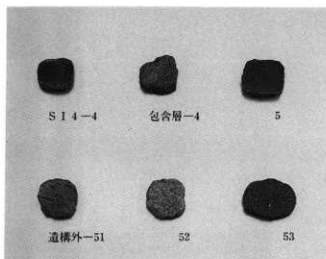


第 2, 3, 4 号住居跡出土遺物

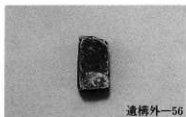
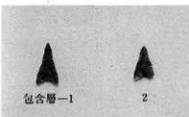
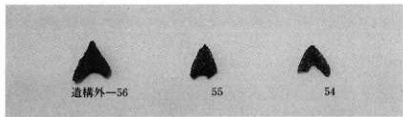
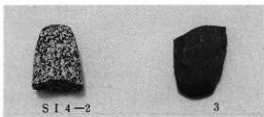
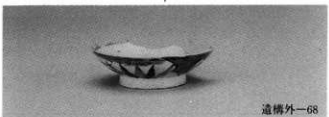
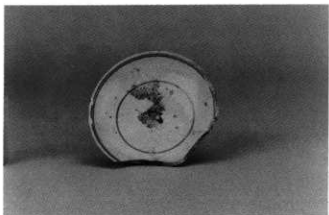
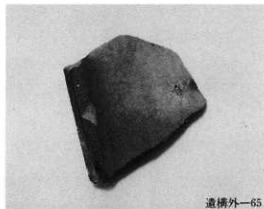


ビット群, 第1号井戸, 第5, 6号溝出土遺物

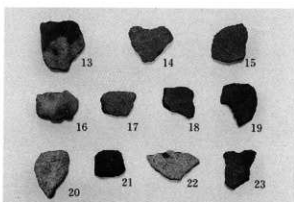
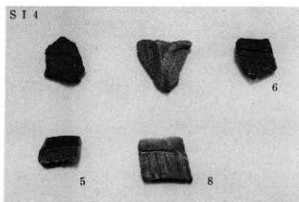
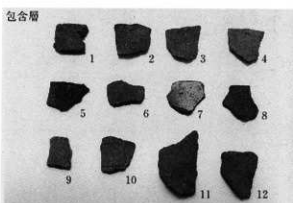
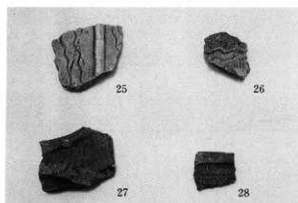
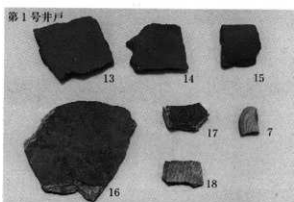
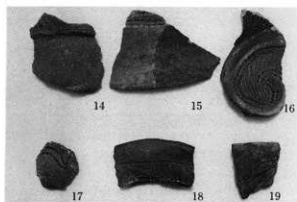
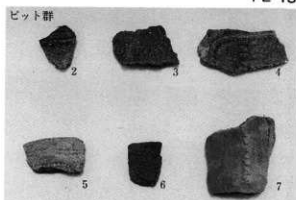
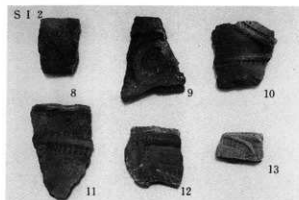




第4号住居跡，第1号井戸，第4号溝，第1号包含層，遺構外出土遺物



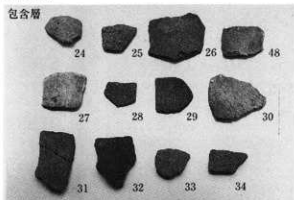
第1, 4号住居跡, 第1号包含層, 遺構外出土遺物



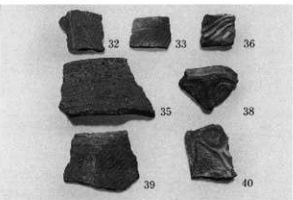
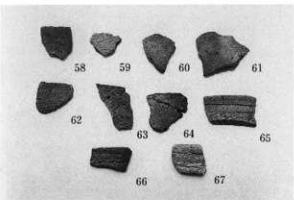
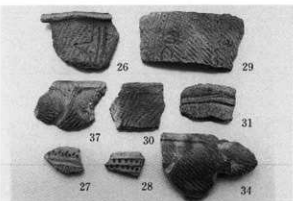
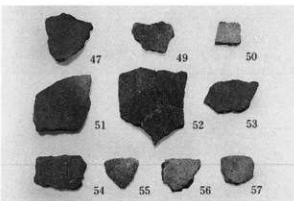
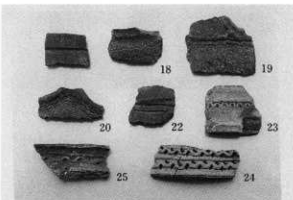
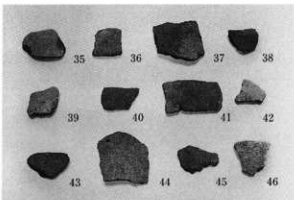
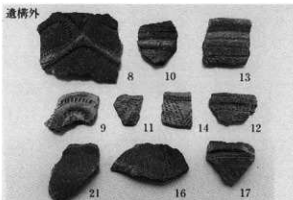
第2, 4号住居跡, ビット群, 第1号井戸, 第1号包含層出土遺物

PL 14

包含層



遺構外



第1号包含層，遺構外出土遺物

茨城県教育財団文化財調査報告第125集

主要地方道取手東線緊急地方道路
整備地内埋蔵文化財調査報告書

西 方 貝 塚

平成9（1997）年6月23日印刷

平成9（1997）年6月30日発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
〒310 水戸市見和1丁目356番地2号
茨城県水戸市生涯学習センター分館内
T E L 029-225-6587

印刷 野沢印刷株式会社
〒310 水戸市元石川町276-27
T E L 029-248-0117

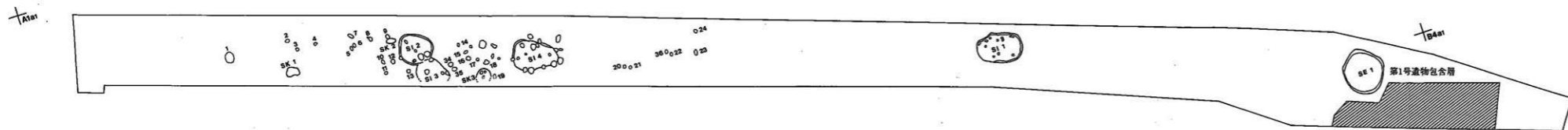
付 圖

茨城県教育財団文化財調査報告第125集

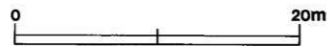
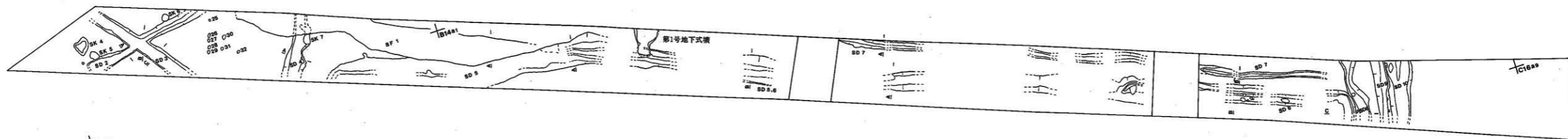
西 方 貝 塚



B区



A区



付図 西方具塚全体図